

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Ethnoichthyological Study of Pla Buk (*Pangasianodon gigas*) at Chiangkhong, Northern Thailand

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤木, 攻, 秋道, 智彌, 秋篠宮, 文仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004166

北部タイ，チェンコーンにおけるプラー・ブツク
(*Pangasianodon gigas*) の民族魚類学的考察

赤木 攻^{*}， 秋道 智 彌^{**}
秋篠宮 文 仁^{***}， 高井 康 弘^{****}

An Ethnoichthyological Study of *Pla Buk* (*Pangasianodon gigas*)
at Chiangkhong, Northern Thailand

Osamu AKAGI, Tomoya AKIMICHI,
Akishinomiya FUMIHIRO and Yasuhiro TAKAI

This paper describes the status of the *pla buk* or Maekhong giant catfish (*Pangasianodon gigas*) in ethnoichthyological discourse based on field studies in Chiangkhong, northern Thailand. As its vernacular and English names indicate (“buk” means colossal or strong), *pla buk* is known for its huge size, attaining a length of at least 2.5 m and a weight of more than 250 kg in adults. Although it is endemic to the Maekhong river and its tributaries, little is known of the ecology and feeding habits of either juveniles or adults. Yet, mature individuals are captured locally in the main stream of the Maekhong by Thai and Lao fishermen in the border areas of northern Thailand and Laos, when they ascend the river for spawning from late April to the middle of May. Local folk knowledge of the *pla buk* is, on the contrary, rich, implying the cultural significance of this fish.

Pla buk fishing has not a long history. As local legends suggest, it might be dated back no more than eighty to one hundred years, when a

* 大阪外国語大学，国立民族学博物館研究協力者

** 国立民族学博物館第1研究部

*** 財団法人山階鳥類研究所

**** 大谷大学

Key Words : *Pla Buk*, *Phi*, artificial insemination, Maekhong river, *Pla Buk* Fishermen's Association

キーワード：プラー・ブツク，精霊，人工繁殖，メーコーン河，プラー・ブツク漁師クラブ

man from Ban Haad Khrai invented a net to catch this gigantic catfish. At present, *pla buk* is caught by a gill net called “mong lai”, which has been modified from the original shorter net called “nam”. It is 225 m long, about 300 cm high and the mesh size is 30 cm. Gill netting is practised using powered boats manned by crews of 4–5.

The rise in demand for the delicious flesh of *pla buk* in local and urban markets, means that the number of fishermen who engage in *pla buk* fishing has increased drastically in number to as many as 70, from four during the last decade. Despite an effective lottery system to avoid crowding and conflict among fishermen, overfishing has inevitably led to a decline in *pla buk* populations.

Ceremonies and rituals held at the onset of the fishing season have multiple significances. First, an evil-chasing ritual is prepared by each group. Second, prior to the first fishing, a good-luck ritual is conducted by special priests with sacrificed pigs and offerings to the master spirits of the river and sand bank. Third, the above-mentioned second rituals are repeated in public on the following day in a gorgeous manner as a festival event of the local community. This transaction is in line with the increasing popularity of *pla buk* fishing and incoming tourists. Fourth, a ritual to entertain the female spirit of the fishing boat is observed.

The series of rituals is focused on and organized by the *pla buk* fishermen’s club of the local community. It bears practical functions not only to manage *pla buk* fishing but also to realize the cultural construction of rituals in accordance with an increasing need for local development and tourism.

Under such circumstances, an artificial insemination project, using captive *pla buk* males and females, was started in 1981 as a conservation goal by the Thai Department of Fisheries, and first success was achieved in 1983. A demonstration of the release of captured *pla buk* found in 1996 also suggests the changing condition of the *pla buk* fishery.

An integrated study of the biological and cultural aspects of *pla buk* fishery thus becomes a good example of anthropological inquiries aimed at understanding contemporary key issues of resources, development, and conservation. Further follow-up studies are also required to clarify the relationships between rivers, fish and the riverine people of the Maekhong river.

はじめに	2. ハートクライ村におけるブラー・ブック漁の伝承
I. ブラー・ブックをめぐる生態と漁撈	3. ブラー・ブック漁に関する儀礼
1. ブラー・ブックの生物学的特徴	1) 河の精霊・土地の精霊への儀礼
1) 分類	2) 舟霊儀礼
2) 生態	III. ブラー・ブック漁をめぐる社会関係
2. ブラー・ブックの漁撈 — 漁具・漁法	1. ブラー・ブック漁師クラブ
II. ブラー・ブックをめぐる民俗と儀礼	2. ブラー・ブック政策の浮上
1. ブラー・ブックに関する伝承	おわりに

はじめに

ブラー・ブック (*Pla Buk*) は学名を *Pangasianodon gigas* と呼ばれるナマズである。名称であるタイ語のブック¹⁾ や種小名の *gigas* が示すように、ブラー・ブックはその巨大な体躯で知られており、全長は2.5から3メートル、体重も250キログラム以上にたつする世界最大級の淡水魚といえる (写真1)。また、メーコーン水系のみに生息し、毎年4月の中旬には捕獲のための儀礼がおこなわれるなど、流域住民に親しまれている魚である。しかし、ブラー・ブックの個体数は近年かなり減少しているとみられており、ワシントン条約 (CITES) 附属書I²⁾ にも指定されている。この重要性を考慮したタイ国の農業・協同組合省水産局によって、本種の人工繁殖計画が1981年より実施され、1983年に最初の成功をみている。その後、メーコーン水系への放流をおこなっているが、人工繁殖によって得られた個体には奇形が多い。また1年魚以降の成長が遅く、性成熟になかなかたつしないなどの問題がある。

ところで、現在までにブラー・ブックについてはいくつかの書籍および文献に記載されてはいるが、生物学的あるいは民俗学的に不明な点が多々ある。くわしくは、以下の章で触れることにするが、分類学的位置や生態的特徴がはっきりとしておらず、とくに後者についてはまったくといってよいほど判明していない。また、漁撈民俗³⁾

- 1) ブラーは「魚」、ブックは「大きい」もしくは「強い」という意味である。
- 2) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約。附属書Iは「絶滅のおそれのある種であって取引による影響を受けており又は受けることのあるものが掲げられている。これらの種の取引は、特に厳重に規制されることとなり、主として商業目的のための取引は禁止されており、学術研究用を目的とした輸出入に際しては、輸出許可書及び輸入許可書の双方が必要とされている」と規定している [通産省公報編集部 1995: 15]。
- 3) 東南アジアにおける漁撈民俗については、海のもので多少の研究があるのみである [FIRTH 1966; NISHIMURA 1984; 秋道 1995a, 1995b; AKIMICHI 1996]。また、淡水域における研究も経済価値を言及したものはあるが [WETCHAGARUN 1980]、漁撈民俗に焦点をあてた研究は皆無といってよい。

や捕獲時に執りおこなわれる儀礼⁴⁾についても若干の記載はなされているものの、その詳細および意味づけについては皆無といえよう。

上記のことからも、プラー・ブックが非常に貴重かつ興味深い魚種であることがわかる。筆者等はこれらのことから、すなわちプラー・ブックをめぐる自然と文化のかかわりあいを調べるために、1996年4月17日より同月22日までタイ国チェンラーイ県チェンコーン郡のハートクライ村における調査を実施した。調査方法については、儀礼観察、村人たちへの直接面接法による聞き取り、そしてハートクライ村とチェンラーイ県ウイエンチャイ郡にある淡水水産試験場においてプラー・ブック漁に使用する舟ならびに漁具などの計測をおこなった。本稿は、それらの結果を中心にしつつ、過去の記載などとあわせながらおこなったプラー・ブックに関する総合的な調査研究の報告である。なお、今回の調査を実施するにあたり、多紀保彦（東京水産大学名誉教授）、田中良高（農業開発教育基金）そして大谷丕昭（毎日映画社）の3氏の協力を得た。また、本稿は全体を全員で討論したうえで作成したものであるが、I. を秋篠宮、秋道、II. を赤木、高井、III. を赤木がそれぞれ主として担当したことを付記しておく。

つぎに、捕獲儀礼がおこなわれたチェンコーン郡の概況について若干の記載をおこなうことにする⁵⁾。

チェンラーイ県にあるチェンコーン郡は図1、2に示したように、タイ国の最北端に位置し、バンコクから1,083キロメートルの距離にある。郡の北部はメーコーン河を境にラオスと接しており、郡庁舎をはじめとした市街地は河沿いに発達している。人口は1995年12月31日現在で6万3,200人であり、民族的にはタイや華人をはじめタイ・ルー、ホー、モン（メオ）、ミエン（ヤオ）、ムーソーなどの少数民族が居住している。とくに少数民族は、おのおのの民族衣装をまとっているため、街を歩くと多民族が共生していることがよくわかる。仏教寺院が56カ所、教会が3カ所、廟が1カ所存在する。基盤産業は農業であり、稲作やメイズ栽培がさかんである。また、工場としては、タバコ葉乾燥工場、精米所、セメント管製造工場などがみうけられる。

1989年1月に内務省通達によりラオスとの往来が正式に許可されて以来、入国管理事務所や税関が設けられ、往来が増加するとともに対岸にあるラオスのフワイサーイ

4) かつて、ラオスのビエンチャンより少し上流にアーン・トーン・ノーン・チャオ、別名アーン・プラー・ブック（プラー・ブックの淵）と呼ばれる場所があり、そこでもプラー・ブックの捕獲儀礼がおこなわれていた [SERÈNE 1945, 1959; RATCHASENA 1948: 70-83; DAVIDSON 1975; RATCHABANDITTAYASATHAN 1979: 10418-10425; 秋篠宮・多紀 1994: 38-46]。しかし、セレーンやデイビッドソン等が記載している儀礼と今回報告するハートクライ村における事例とは趣きをこととしており、両者の関係も不明である。

5) 主として、Amphoe Chiangkhong [1996] による。

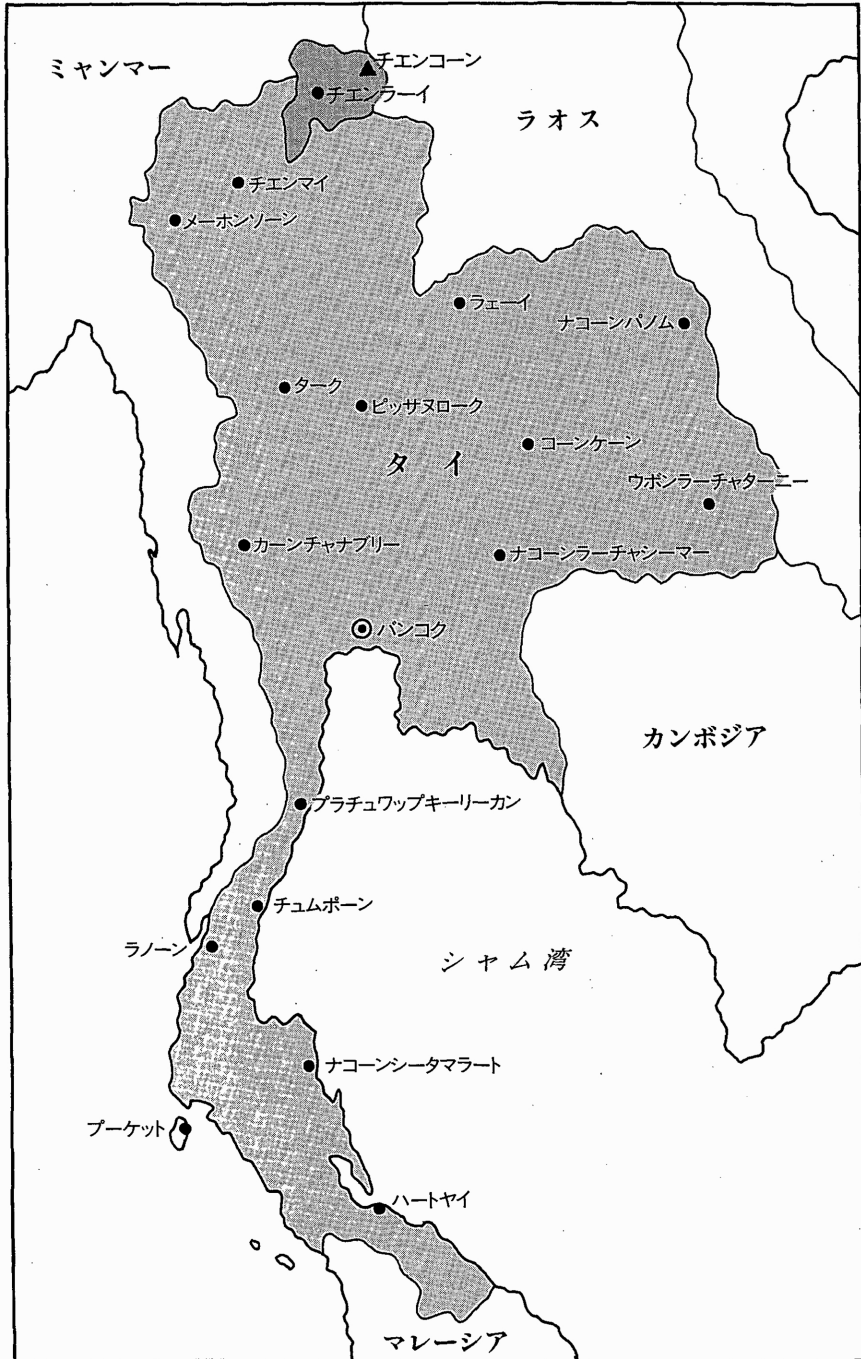


図1 タイ国概図

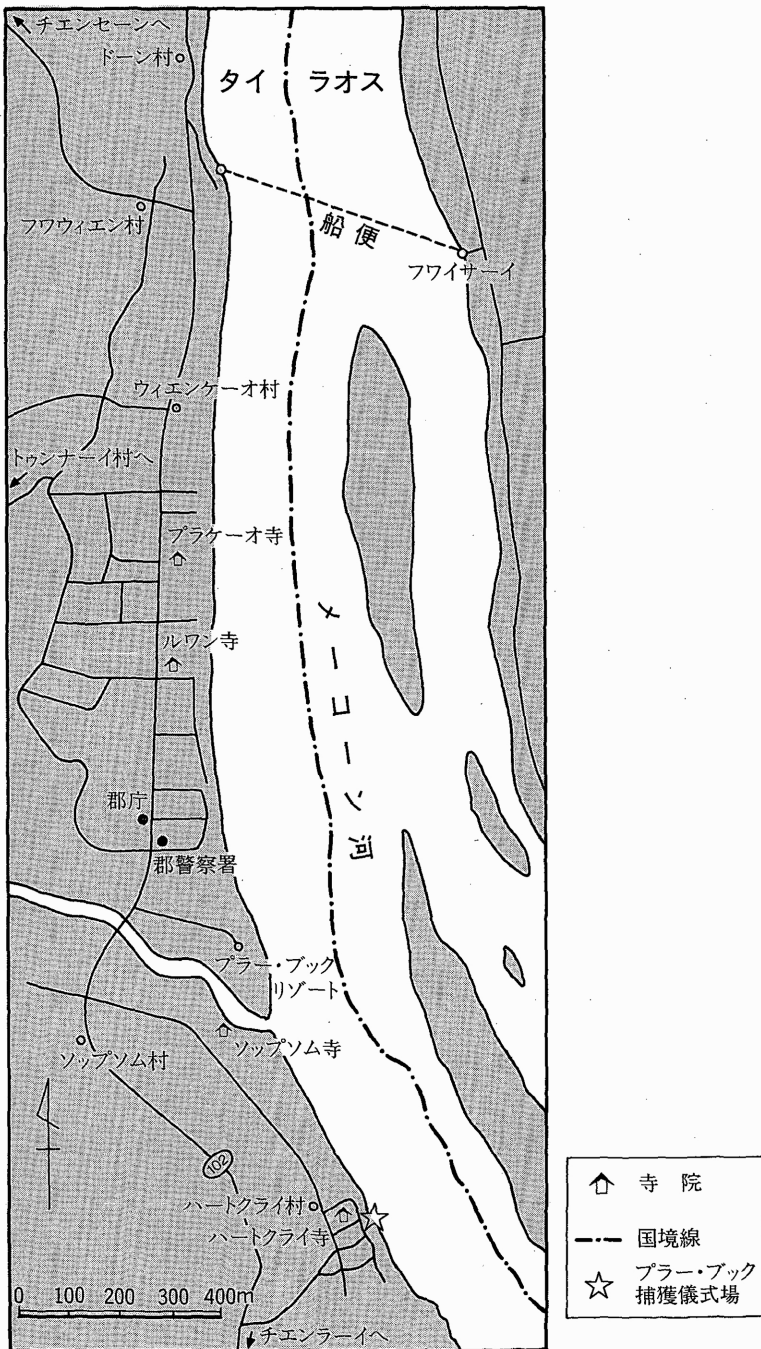


図2 チエンコーン郡中心部

との国境通商が盛んになってきている。また、近年、中国、ミャンマー、ラオス、タイの4カ国相互間のメーコーン河を利用した通商路の開発が試みられており、チェンコーン郡もその一翼を担う重要な位置を占めることが期待されているという。

なお、チェンコーン郡は7つのタムボン（郡と村のあいだに位置する行政単位）からなり、筆者等の調査地であるハートクライ村はタムボン・ウイエンに属する11の村のひとつである。村の人口は約950人にすぎず、郡内の他の村とはほぼ同様に農業を産業としているが、後述のように、村が臨む部分のメーコーン河の地勢が特異的で、ブラー・ブック漁を可能にするという独自性を有していると考えられる。なぜならば、4,000キロメートルを越えるメーコーン河でブラー・ブック漁が現在おこなわれているのは、このハートクライ村付近ただ1カ所だけだからである。

I. プラー・ブックをめぐる生態と漁撈

1. プラー・ブックの生物学的特徴

1) 分類

ブラー・ブック (*Pangasianodon gigas*) は、硬骨魚綱、条鰭亜綱、ナマズ目、パンガシウス科 (*Pangasiidae*) に属し、メーコーン水系のみに生息する淡水魚である。全長は最低でも2.5メートル、体重250キログラム以上にたっし [SMITH 1945: 374; POKASWAN 1969]、世界最大級の淡水魚として知られている。

パンガシアノドン属はブラー・ブック1種のみを有する属であり、両顎と口蓋の歯が欠如し、上顎には非常に短いヒゲがあり、また眼の位置がかなり低位にあることにより他のパンガシウス属と区別されている [CHEVEY 1930: 536-542]。

しかし、捕獲されているブラー・ブックの個体がすべて1.4メートル以上のものであること、パンガシウス属のなかには、加齢にともなって歯がなくなっていくものがあること [SMITH 1945: 372] を考えると、ブラー・ブックはパンガシウスの仲間のいずれかが老成し、巨大化して他のパンガシウスとは異なる形態をもつようになったものである。すなわち小型（若齢）の個体はパンガシウスの1種であるという説も唱えられてきた。

これらの問題を解決するためには、さまざまな成育段階におけるブラー・ブックの個体を比較検討することが必要であるが、先にのべた1.4メートルに満たない個体の捕獲は皆無である。1981年、タイ国水産局はブラー・ブックの種保存を目的として人

工繁殖プロジェクトを実施し、1983年に最初の稚魚を得ることに成功した。これにより、いままで不明瞭であった分類学的諸問題を解決する糸口ができたといえよう。というのも、これによりブラー・ブックが明らかに他のパンガシウス科魚類とは異なる独立した種であることが証明されたからである。

つぎに、1983年の人工繁殖の成功以後ブラー・ブックについて判明してきたことについてのべる。

ミーカーン [MEENAKARN 1984; MEKAN 1988] は、ブラー・ブックと同じパンガシウス科のブラー・サワイ (*Pangasius hypophthalmus*⁶⁾) の外部形態を比較し、さらに両者の成長ともなる形態的变化について調べ、秋篠宮は尾部骨格を中心とする形態やアイソザイム分析をもとにブラー・ブックのパンガシウス科内における位置などを検討した [FUMIHITO 1989: 113-119; FUMIHITO and TAKI 1989: 901-904]。さらに、ロバーツとウィッターヤーンやウィッターヤーンは各種外部および内部形態そして発生の段階を追ってパンガシウス科の分類についての再検討をおこなっている [ROBERTS and VIDTHAYANON 1991: 97-144; VIDTHAYANON 1993: 1-203]。

これらの研究により、ブラー・ブックはパンガシウスの仲間が巨大化したものではなく、独立した種であることが判明した。また、ミーカーンをはじめロバーツとウィッターヤーン等はブラー・ブックをパンガシアノドン属ではなくパンガシウス属にするべきことを提唱している [MEKAN 1988; ROBERTS and VIDTHAYANON 1991: 102]。いっぽう、秋篠宮等はアイソザイム分析からパンガシウス科内における10種⁷⁾が比較的大きな遺伝的距離で分離する3群に分かれること、そして従来種および属の分類と必ずしも一致しないことを明らかにしており、ブラー・ブックも従来どおりパンガシアノドン属に分類することを支持している [FUMIHITO and TAKI 1989: 901-904]。

以上、パンガシウス科内におけるブラー・ブックの位置について触れたが、今後さらなる比較研究（形態学および分子系統学など）がなされることにより、その系統関係が明らかにされることであろう。

2) 生態

a. 生息域

1) でブラー・ブックの分類学的諸問題について触れたが、本種は、その生態につ

6) かつて、*Pangasius sutchi* とされていたもので、ロバーツとウィッターヤーン [1991] によって *Pangasius hypophthalmus* として同定された。

7) *Pangasius*, *Pangasianodon*, *Pteropangasius*, *Helicophagus* の4属をふくむパンガシウス科魚類10種を対象とした。

いてもほとんど明らかにされていない。まず、1.4メートル以下の個体が捕獲されていない点は非常に興味深いことがらといえる⁸⁾。一般的に考えて、淡水魚の場合、稚魚を確認できないということは、きわめて稀であろう。以下に、現在までに記載されている本種の生態について紹介する。

伝承によると、ブラー・ブックの雌は、カンボジアのトンレサップ湖から中国の大理湖までの、約2,800キロメートルを游泳し、大理湖で待っている雄のところに産卵をしに行くという [SMITH 1945: 373; DAVIDSON 1975: 181]。この言い伝えは、一見ありそうな話ではある。たしかに、ビエンチャン近辺、ルアンプラバーン近辺そしてチェンコーン近辺と、下流から上流に向かうにしたがって、本種の出現時期が遅くなるとともに、卵巣の成熟度がすすむことを鑑みると、産卵のためにメーコーン河を溯上することは確実といえよう。しかし、デイビッドソンの報告によれば、1974年にラオスのフワイサイ付近で捕獲された14尾のブラー・ブックのうち12尾が雌であった [DAVIDSON 1975: 183-184]。また、タイ国水産局による人工繁殖プロジェクトがチェンコーン郡ハートクライ村でおこなわれているが、これは雌雄双方が捕獲された時点で実施される。このことから、前述した雌雄別居説は完全に否定することができる。また、トンレサップ湖から大理湖へ溯上する話について、パヴィーはかつてトンレサップ湖にはブラー・ブックが豊産していたことを述べ [PAVIE 1904]、ウィットヤーンも本種の生息域を「タイ国のムーン川とカンボジアのトンレサップ湖をふくむメーコーン河の固有種」と記載している [VIDTHAYANON 1993: 23]。しかし、トンレサップ湖から大理湖へと溯上していく途中には、カンボジアとラオスの国境付近にコーンの滝（高さ約30メートル）があり、これを越えるのは不可能なのではないだろうか（図3）。いっぽう、ウィットヤーンは大理湖はヤンビー川によってメーコーン河とつながっているが、大理湖は、標高2,140メートルのところに位置し、その場所が急流と滝のため「魚止め」の役割を果たし、ブラー・ブックが大理湖へ入ることが不可能であり [VIDTHAYANON 1993: 24-25] (VIDTHAYANON による CHU and KOTTELAT からの私信)、パヴィーによって記載されている大理湖(Lac Tali)はグランド・

8) ウィットヤーン [1993] はデュランの記載として、カンボジア領メーコーン河下流域の Bac-Lieu においてブラー・ブックの稚魚を捕獲し、その最小のものは125ミリメートルであった [DURAND 1940]。また、Bac-Lieu は、メーコーン・デルタの河口の西端から50キロメートル離れたところに位置するマングローブ域でカンボジアの海岸沿いにある [VIDTHAYANON 1993: 24] と記している。しかし、メーコーン河の河口はすべてベトナム領であり、また Bac-Lieu もベトナム領である。したがって、ウィットヤーンもしくはデュランのいずれかの記載に誤りがあると考えられるし、125ミリメートルの個体も真偽のほどはさだかではない。

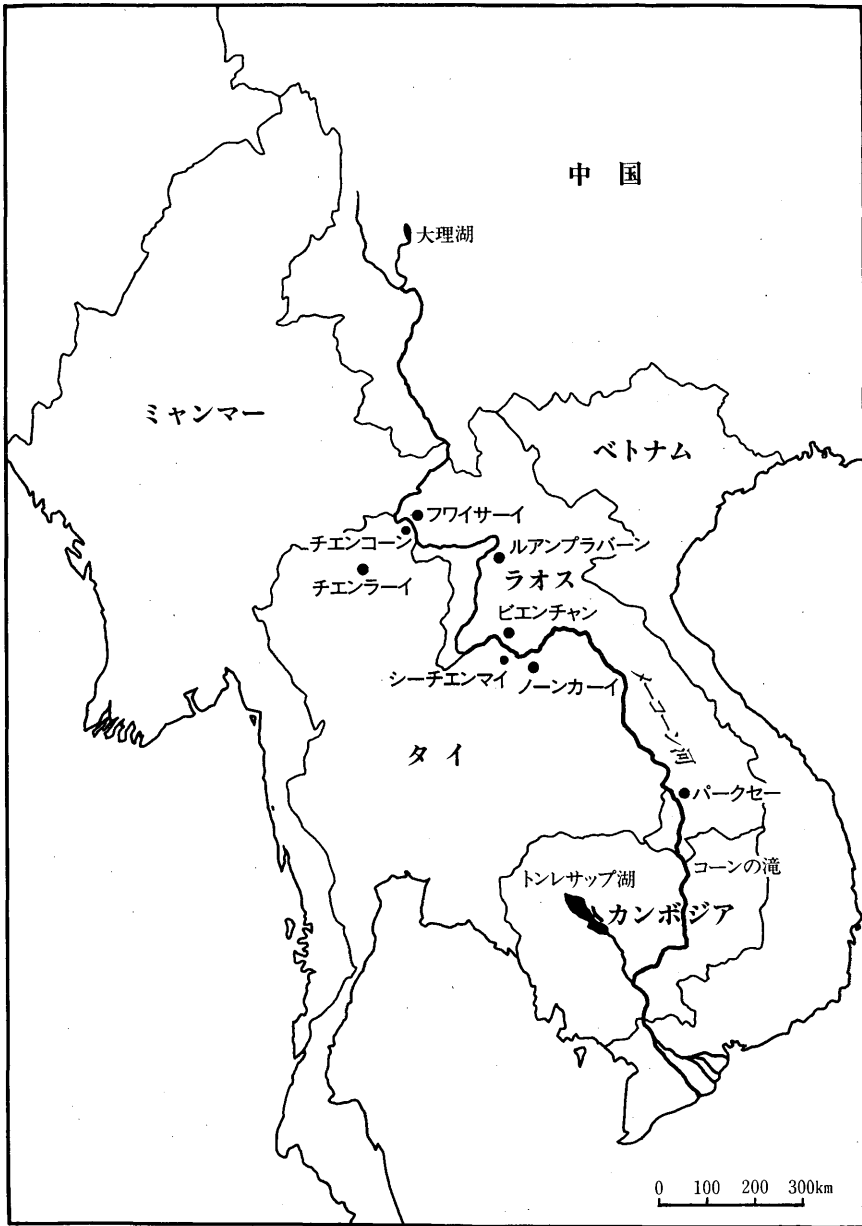


図3 メーコン河概図

ラック (Grand Lac) すなわち、カンボジアのトンレサップのことではないかと記している [VIDTHAYANON 1993: 24-25]。しかし、コーンの滝には触れず大理湖付近の急流と滝のみに言及するウィッタヤーノンの解釈にはかなり無理があるように思える。むしろ、トンレサップ湖周辺のブラー・ブックの確認作業が必要であろう⁹⁾。

では、ブラー・ブックの生息域はメーコーン河約4,350キロメートルのうち、どのくらいの範囲になるのだろうか。1960年代の漁師の言によれば、その下流側ではラオスのパークサー付近までは捕獲されていたようである [多紀 私信]。また、上流域については、タイ国の人工繁殖プロジェクトがおこなわれている、チェンコーンでの卵巣成熟度が完熟にいたっていないことから判断すると、本種がさらに溯上して中国域まで入っていることは、ほぼ確実と言えよう。しかし、明確な生息域については未だ不明であり、今後のさらなる調査結果を待つ必要がある。

b. 食性

1983年に人工繁殖が成功したことにより、仔稚魚の食性がかなりわかってきている。先にブラー・ブックの両顎および口蓋には歯の存在を認めない旨を記したが、幼生個体 (約38センチメートル以下) には存在し、とくに5センチメートル前後の個体はかなり先端が鋭いものを有している [FUMIHI 1989: 116]。このことから、仔稚魚時代の食性が草食ではなく肉食性であることが想像できる。

実際、この時期のものはプランクトン食性であり、ウィッタヤーノンは「人工繁殖で得られた稚魚ですら、激しい共食いをみせる」というボンブラシット (PHONPRASIT) の報告を紹介している [VIDTHAYANON 1993: 24]。いっぽう、成魚の食性については多紀がおこなった消化管内容物調査においてシオグサ (底生藍藻類の1種) のみが観察されている [多紀 私信]。詳細な研究は未だおこなわれていないが、プランクトン食性から底生藻類食性への移行は、歯の消失する時期、すなわち体長40センチメートル前後ではないかと考えられる。

2. プラー・ブックの漁撈——漁具・漁法

ブラー・ブックを漁獲するための漁法は、現在に至るまで大きくみて3つの段階に分けることができる。その過程を時代をおって実証的にたどることはかならずしもで

9) ルアンブラバーンやチェンコーン付近で捕獲されるブラー・ブックと同種であるのか、もしくは、同種であった場合に異なる個体群の可能性などを調査する必要があると思われる。また、コーンの滝をブラー・ブックが登るといった証拠も必要であろう。

きないが、チェンコーンにおける伝承（Ⅱ-1を参照）と1996年4月の現地調査によって得られた資料をもとに記述する。

a. ナーム

チェンコーンにつたわる伝承によると、最初は、投網がブラー・ブック捕獲用の網として用いられていた。しかし、網ごと水中に引きずりこまれ大格闘の末にようやく捕獲するなど、投網による捕獲には危険性がともなうということで、亜麻製のナームとよばれる刺網が考案された。これはあらかじめ河に仕掛けておき、ブラー・ブックがかかるとのを待つために用いられる網である。

ウイエンチャイ郡の淡水水産試験場に保管されているナームを実測したところ、網の長さは51メートル、高さ2.2メートル、網目は20センチメートル、ノットの間隔は42センチメートルであった。網の重りは鉛をプラスチックで覆ったもので、1個あたりの重さは約120グラムである。

また、過去の記録によると、ナームの長さは100ヒロ（150メートル）、高さ2ヒロ（3メートル）、網目は1カム（20センチメートル）であり、乾燥したヒョウタンを浮きとして2ワー（約4メートル）おきにとりつけるという記述もある [POOKASWAN 1983]。現在、ナームは主としてブラー・テーパー（*Pangasius sanitwongsei*）の捕獲用に使われている。

b. クワック

つぎに考案されたのはクワックである。ハートクライ村でおこなわれた儀礼（1996年4月18日）のさいに現場で実測したクワックはナイロン製で、その長さは、7.2メートル、高さは2.5メートルであった。網の下端両端部には石製の重りがとりつけられていた。網目は1辺26～27.5センチメートルの菱形でノットの間隔は53センチメートルであった（写真2）。別の事例では、クワックの長さは4ワー（8メートル）、網の中央部の高さが3ワー（6メートル）、両端部の高さが2ワー（4メートル）、網目はナームとおなじ20センチメートルとされている [POOKASWAN 1983]。

ナームにくらべてクワックの網の長さが短いのは、ブラー・ブックが水面に浮いてきたところを見はからって至近距離で網入れをおこなうからである。通常、5人乗りの舟で操作がおこなわれる。この場合には、2人が漕ぎ手、2人が網の操作をおこなう。もう1人はブラー・ブックの後ろ側に石を投げて威嚇して、ブラー・ブックを網のほうへ誘導する役割をもつ。投げる石としては河原にあるものを使用し、実測によ

ると石の直径は12センチメートル程度で重さ約1,200グラムであった。このくらいの石を3, 4個携帯し、船上から投げ入れる。船上において石を投げ入れる役目を果たす人は前方に位置する。

c. モーン・ライ

クワックをさらに改良した網が現在用いられているもので、モーン・ライと称される。ハートクライ村で使用されているものの実測によると、長さは225メートル、高さは両端がそれぞれ3.1メートル、2.7メートルであった。網目は、30センチメートルである（写真3）。

網の上部には、木製の浮き（ポム）がとりつけられる。浮き自体は長さ40センチメートル、内径3×2センチメートルの棒状のもので、材質は、ソーの木（クマツヅラ科のキダチキバナヨウラク：*Gmelina arborea*）である。浮きはほぼ154センチメートル間隔でとりつけられる。網の下部には鉛製の重り（ユエン）がとりつけられている。これは鉛のリングをプラスチックでコーティングしたもので、60センチメートル間隔につけられている。網自体は重さが約200キログラム、重りだけで50キログラムあることになる。網は原材料をバンコクから15,000バーツで購入し、現地で製作される。

網は河を横断するように中央部から岸よりに移動しながら投げ入れられる。流速があるために、網は馬蹄型にはほぼ河川の半分くらいにひろがる。網の先端部には目印となるプラスチック製の浮きをつける（写真4）。

また、網に魚がかからない場合、船上から河に石を何個も投げ入れて、ブラー・ブックを威嚇することもおこなわれるという。

以上のように、大型の刺網がブラー・ブック捕獲用に利用されてきた。網が時代的にナム、クワック、モーン・ライと変化するとともに、網目の大きさも20センチメートルから27センチメートル、30センチメートルへと大きくなっている。網の高さも2.2メートル、2.5メートル、2.7～3.0メートルとすこしずつ増加する傾向がわかる。網の長さをナムとモーン・ライでくらべると、約50メートルから225メートルと4倍以上も長くなっている。もっともクワックはブラー・ブックを発見してから至近距離で網を入れるためのものであり、ナムやモーン・ライを用いた刺網とは漁法からみても異なった性格のものであると位置づけることができる。

d. 舟

ブラー・ブック漁に用いられる舟は、平底の川舟である。船底の両端に舷側板を接

合した構造船である。平均的な舟の全長は1,045センチメートル、高さは中央部で船底から40センチメートル、船首と船尾は底面から97センチメートル、最大幅は91センチメートルの細長い舟である。船首と船尾はやや上方にそりがかり、しかも船首部、船尾部ともに二股に突出している（写真5）。

現在でも櫂（マイ・パーイ）を用いて漁がおこなわれるいっぽう、舟の中央部よりやや後方にエンジン（たとえばホンダの10馬力エンジン）をとりつけたものや、船外機つきの舟の改良が施されるようになった。櫂はチーク（*Tectona grandis*）材製で、その全長は144センチメートルであった。

舟にはいくつかの区分名称がある。船首からホーン・ファ、ホーン・カン、ホーン・クルアン、ホーン・ナン・ノーン、ホーン・ターイである。このうち、網をおく場所はホーン・カン（ホーンは「室」または「部分」の意味。カンは「閉じこめておく」の意味）、機関部の位置するのがホーン・クルアン（クルアンは「エンジン」の意味）、ホーン・ナン・ノーンは舟の霊である女性が眠る場所とされている（ナンは「女性」、ノーンは「眠る」の意味）。捕獲されたブラー・ブックをおく場所は網と同じホーン・カンであり、水中に投げる石をおいておく場所はホーン・ファである。ファとターイはそれぞれ「頭」、「後ろ」の意味である。

e. ナマズ漁法の展開

ブラー・ブックは淡水魚としては先述したように世界最大級の大きさをもつ。体長は2.5メートル以上、体重250キログラム以上にたつする。したがって、巨大な魚を捕獲するための漁具および漁法が必要となる。前項で明らかにしたように、長さ200~250メートル、高さ3メートル、網目30センチメートルの刺網はブラー・ブック捕獲用に考案された特殊な漁具であるといえることができる。

しかし、ブラー・ブック以外にもさまざまな種類のナマズが世界には分布している。タイだけを例にとっても、すくなくとも100種類のナマズ目魚類の分布が知られている [SMITH 1945]。それではブラー・ブック以外のナマズは、どのような漁法によって捕獲されるのであろうか。今回の調査で明らかになった諸点を漁具別に記述しておく。

(1) トゥム・ブラー・ドゥック（写真6）

一般に立てておく釜はトゥムとよばれる。トゥムは「分銅、おもり」の意味である。写真は竹製のもので、内部に生きたシロアリ（プルワック）を餌として入れ、釜の上

部が水面にくるように水田や池に設置する。この筥でブラー・ドゥック（ヒレナマズの仲間：*Clarias spp.*）を捕獲することができる。

（2）ベッド・バック（写真7）

ベッドは「針」、バックは「刺す」の意味である。竹製の棒（実測では、長さ66センチメートルと90センチメートル）に釣り糸をむすび、釣りばりには生きたカエルや小魚を餌としてつけ、水田や湿地でブラー・ドゥックのほかブラー・チョーン（ライギョの仲間：*Channa striatus* と *C. gachua*）、ブラー・クライ（ナイフフィッシュの仲間：*Chitala chitala*）などを漁獲する。仕掛けは10メートル間隔に約100本ほどを水田や湿地の土手や堤に突き刺して準備する。夕方に仕掛けて翌朝にとりあげる。釣りばりは2種類あり、大型のものは一般的にライギョ用、小型のものはヒレナマズ用に使われる。

（3）ソーン（写真8）

写真8にあるような竹製の筥で、長さは122センチメートル、入口の内径は16センチメートルである。筥自体は1本の竹を細く割いて成形したものや細く割いた竹を編んだものである。筥のなかには乾燥させた柴（コー）を入れ、草本のはえる低湿地や静かな川底に設置する。この筥でヒレナマズ、ライギョ、ナイフフィッシュ、グーラミーの仲間（*Trichogaster spp.*）などを捕獲する。この筥には大小2種類があり、大きいものは2メートルくらいのものである。写真8は小型のもので、主として浅瀬で使われる。

（4）ヘー

投網のことで、かつては麻製であったが現在はナイロン製のものを使う。投網を広げたさいの網の半径は4～12メートル、網目は1.55センチメートルである。この投網は池や湖、中小河川で用いられる。ヒレナマズ、ライギョのほか、砂泥にもぐる魚類が漁獲される。ヘー・ブラー・ヤイは「大きな魚用の投網」という意味で、チエンコーン周辺にあるイン川やメーコーン河で用いられる。とくにパンガシウスの仲間（*Pangasius spp.*）やギギ科の魚（*Hemibagrus spp.*）を漁獲するさいに使用される。投網の半径は4～6メートル、網目の大きさは15センチメートルである。

また、先述のヒレナマズやライギョなど、網を入れたときに砂泥にもぐってしまう魚には、ヒモのないものを用い、コイ科魚類など中層を泳ぐ魚にはヒモつきのもの

(ヘー・トップ・ブラオ)を用いる。

(5) サイ・ポーン (写真9)

先にのべたトゥムに対して横にねかせて設置する筈をサイと呼ぶ。サイ・ポーンは、「葉巻の筈」の意味で、中央部がふくれた形をしている。入り口が3ヶ所あり、水路や河川に両側を棒で支持して設置する。水路には簀子のフェンスをはり、筈は流れに対して直交する方向におかれる。

(6) ローブ・ノーン (写真10)

写真10のような筈で、胴長は実測によると、90センチメートルと115センチメートルのものがあつた。水路や河川で用いられ、ナマズやライギョを捕獲する。上述のサイ・ポーンと併用することもある。ノーンは「眠る」ことを意味する。

以上のようにナマズを対象とする漁法をみると、圧倒的に筈が多く用いられており、ナマズの多くが底生性の魚であることを端的に示している。また筈以外には、釣りと投網が用いられる。

季節的にみると、メーコーン河の水位は、1～5月における乾季に低下し、6～12月の雨季に上昇する。このうち多くの漁法は雨季の後半から乾季に集中して見られ、プラー・ブックの産卵回游に対応した大型の刺網漁はちょうど乾季に水位が低下する時期と対応して用いられる [WELCOMME 1985]。

II. プラー・ブックをめぐる民俗と儀礼

1. プラー・ブックに関する伝承

これまでのべてきたとおり、プラー・ブックは、つぎのような点で、淡水魚としてはきわめて特異な存在である。①淡水魚としてはきわめて大きいこと(先述したように、1.4メートル以下の捕獲例はない)。②捕獲時期が限定されている(産卵のための溯上期と水位の下がる時期が一致する乾季の4月から5月)。③捕獲場所が限定されている(明確な時期はわからないが、少なくとも1950年代までは、ラオスのビエンチャンの上流約20キロメートルに位置するアーン村でも捕獲されていたが、現在では筆者等の調査地であるハートクライ村付近のみで捕獲が可能である)。④捕獲数が少な

表1 ブラー・ブックの捕獲数および詳細

年 数	場 所			性 別			重 量 (kg)		時 期	
	クラブ*	ラオス	その他	雄	雌	不明	最大	最小		
1973	34		不明			不明	不明	不明	不明	
1974	14		不明		12	2	200	135	4/20-5/21	
1986	18	18	—	—	12	6	—	271	118	—
1987	24	24	—	—	16	8	—	262	124	4/14
1988	42	42	—	—	27	15	—	250	120	4/20-5/12
1989	60	59	1	—	44	16	—	282	124	4/26-5/24
1990	69	51	11	7	40	22	7	228	112	4/14-5/16
1991	31	22	8	1	22	8	1	240	128	4/26-5/26
1992	35	26	8	1	18	16	1	250	105	4/26-6/ 9
1993	48	30	18	—	25	23	—	258	130	4/30-5/22
1994	18	15	3	—	10	8	—	273	133	4/21-5/22
1995	16	11	4	1	10	6	—	253	121	4/29-5/15

* ハートクライ村

(出所)1973, 1974の両年については Davidson [1975: 182] から, そのほかの年についてはハートクライ村ブラー・ブック漁師クラブ所蔵の資料から作成。

い(年間, 50尾を越えることは稀である。表1参照)。⑤成育の過程や生態が明白でない。

こうした特異性が, 流域住民, とりわけ捕獲地の周辺住民のあいだにブラー・ブックに関するさまざまな民俗知識や伝承ないしは信仰を生む素地になっている。ここでは, それらを紹介することにする。なお, (1), (2), (3)は註を付した文献による。また, それ以外は, 今回の調査での村びとからの聞き取りによる。

(1) 産卵場所は中国雲南省の大理湖である

雄はつねに大理湖内に棲んでおり, 金色に輝く鱗をみせながら泳いでいる。そして下流からこの湖をめざして上流へ長旅をする雌を待っている。彼女たちが到来すると湖中で産卵をする。産卵が終わると, 雌は再び河を下っていく [DAVIDSON 1975: 181; 多紀 1979: 182]。

(2) 元来は海の魚である

もともとは海の魚である。その昔はメーコーン河はなかった。龍神があるときこの河を開き, その最初に河を上った魚がブラー・ブックであった [DAVIDSON 1975:

181; 多紀 1979: 182]。

(3) 河掘り競争の勝者に神が与えた魚である

ノンカーイ県のシーチェンマイ郡（以前は、ブラー・ブック漁がおこなわれていた）においての伝承である。メーコン河もまだなかった昔、二人の領主が喧嘩をしたさい、戦いになれば民が傷つくのを恐れ仲裁に入った神が河掘り競争を提案し、早く海に繋がる河を掘った方に褒美としてブラー・ブックをとらせると約束した。そのとき勝者となった領主は、とにかく早くと無計画に突貫作業で曲がりくねった河を掘った。その河が今日のメーコン河であり、ブラー・ブックはそのときの褒美である [荘司 1996: 30-33]。

(4) 河底の深い洞窟に棲んでおり、女神の番人がいる

通常は河底深くにあるとされる自然の洞窟に棲んでおり、産卵時など特別なとき以外には外にでない。ブラー・ブックが棲んでいそうな場所を「タム（洞窟）」とか「ワンチャオ（宮殿）」と呼ぶ。そこから出ようとしても、女性である水神（メー・コンカー）が番をしていて不可能である。だから、この女神の注意をそらしたりして、番を手薄にすることが、ブラー・ブックを洞窟の外に呼びだす要領である。

(5) ブラー・ブックは神様が守護している魚である

もろもろの神（チャオ）がこの魚を護っている。実際に、ブラー・ブックの体の両側面には、主である神が自らの所有物であることを示すために押印した「ワ」と呼ばれる黒い斑点が5つずつある。だから、捕獲をおこなうというのであれば、土地の神（ブラブーム・チャオティー）、水神（メー・コンカー）などをお願いし、舟霊（メーヤー・ナーンルア）にも手助けを請わなければならない。つまり、そのための儀礼を執りおこなわねばならない。

(6) ブラー・ブックは諸葛孔明の生まれ変わりである

主として華人系タイ人のあいだでの伝承。ブラー・ブックは三国時代の蜀の宰相として著名な諸葛孔明（コンベン）の生まれ変わりである。それが証拠に、音に敏感で人間の言葉を解するなどきわめて賢い魚であるという。実際、バンコクでは「孔明魚」との漢字表記で看板を掲げて売りだしているレストランがある。

以上が、プラー・ブックにまつわる伝承である。総じていえることは、プラー・ブックがメーコーン河の神であるとの信仰はないようであるが、やはりメーコーン河に棲む多くの生物のなかでも特別の存在——たとえば、「神の使者」——として流域住民の意識に存在していることは間違いない。ただ、その捕獲場所が限定されているため、メーコーン河に臨む北部タイや東北タイ全域でのポピュラーな伝承とはなっていない。捕獲場所付近を中心とした流域住民、漁師、一部の美食家のあいだと考えるとよい。

もっとも、この魚が往古より流域住民とかかわりを有していたことは、東北タイの著名な景勝地であるウボンラーチャターニー県のパーテーム（メーコーン河に臨む絶壁）の壁に残っている考古学的（いまから約3千年前の）絵画に、このプラー・ブックに擬せられる魚（写真11）が描かれていることから明らかである。

2. ハートクライ村におけるプラー・ブック漁の伝承

プラー・ブック漁の歴史については未だ不明なことが多い。以前は、パークセー、ルアンプラバーン、シーチェンマイなど、メーコーン河のいくつかの地点で漁がおこなわれていたが、今日では調査地であるハートクライ村付近に限られている。なぜ、この村の臨む河がプラー・ブックの捕獲場としての適地なのかといえば、その地勢的条件にある。

第一は、この村の位置する河のなかには中洲が存在し、プラー・ブックが上ってくる乾季には水面に現れてくる。この中洲により川幅が極端に狭くなり、プラー・ブックの通路は自ずと限られてくる。第二は、河底が全面的に砂利や小石でしかも平らであるため、プラー・ブックが隠れる場所がなく、水面近くを泳いで溯上する以外にない。加えて、こうした場所は網が張りやすい。このふたつの条件が整っているところが、メーコーン河には少ないという。というより、現在ではこの村付近以外にはないのであろう。

この村の長老で、今はプラー・ブック漁の第一線から退いたとはいえ、少し前までは捕獲名人として知られたソー・チナラート（69歳、ハートクライ村生まれ）や村長であるチャムラット・チナラート（52歳、村長になって6年）からの聞き取りを中心に、この村のプラー・ブック漁の歴史を簡単にのべることにする¹⁰⁾。

ハートクライ村でのプラー・ブック漁の歴史はおおよそ90年前後である。言い伝えによると、その昔、体格がよく頑健なターオ・ベット（または、セーン・ベット）と

10) Pookaswan [1983] も参考にした。

称する男がいた。彼が、20歳になった頃のある日、魚捕りに出かけ巨大なプラー・ブックと出くわし、サベンというヤスで刺そうとしたがうまくいかず、どうしようもなかった。悔しさに夜も眠れず、数日間考えた末、目の大きい「ヘー（網）」を作り捕獲に出かけた。うまくヘーをかぶせることに成功したものの、プラー・ブックの力に負けて、舟から引きずり落とされてしまった。しかし、運よく、浅い場所であったため、長時間の格闘の末、捕獲に成功した。これが、この村におけるプラー・ブック漁の最初である。

ヘーでは危険であることを経験した彼は、2、3年後に「ナム」と呼ばれる新しい網を考案した。その後、このナムは20年ばかり使用されていたが、その後彼はさらに「クワック」という別の種類の網を考え出した。この網でターオ・ベットは仲間と組んでプラー・ブックを多数捕獲し、販売してはお金を稼いだ。そして、その金で木材運搬用の象を1頭購入し、その象に「メー・ブック（ブックの母）」という名をつけたという。

その後、捕獲道具は先のソー・チナラート等により改善され、1967年頃から「モン・ライ」と称される網が使用されるようになり、今日に至っている。

プラー・ブック漁ではその個体の確認作業がきわめて重要で、溯上してくるさいの波跡、つまり頭部分から尾の方へ向かって両脇にできる特別の流れを見極めねばならない。捕獲時期になると、河岸のやや高いところに設けられた臨時小屋（ハーン）から川面を凝視し、水面の変化を観察するのである。この役目を果たす者を「プラー・ブック見（モードゥー・プラー・ブック）」と呼んでいる。彼はプラー・ブックの波形を発見するや、準備万端の舟に信号を送り、舟はすぐに出漁する。また、クワックを使用する場合、プラー・ブック見は舟の漁師に指示を送る役目を果たす。両者の連携がうまくいく必要がある。ソー・チナラートの話によると、雄と雌では波形が異なり、雄の方が大きいという。漁期は、4月20日前後から始まり、雨季になり水量が増え中洲が水を被るようになると終わる。

きわめて興味深い話がある。魚類学者のあいだでは、プラー・ブックは1種類しかない、すなわち *Pangasianodon gigas* 1種のみというのが定説である。しかし、この説に対して、この村の漁師たちは、3種類があると反論する。「プラー・マファイ」、
「プラー・ナン」および「プラー・ファクムハーンナム」と彼らは呼びわけている。実際、漁師たちには判別が可能のようで、彼らが説明するそれぞれの違いと特徴のおおよそは、つぎの通りである。「プラー・マファイ」は、小型で、胴が細長く淡いピンク気味の赤色で、黒点が散在する。最大のもので胴回りが約8カム（1カム=約20

センチメートル)である。なお、「マファイ」はトウダイグサ科植物の1種である(*Baccaurea ramiflora*)。「プラー・ナーン」は、3種類のなかでもっとも美しく、クリーム色の細長い胴は後部が淡い灰色で、親指大の黒点がある。最大のもので約10カム。「ナーン」は女性の意味である。「プラー・ファクムハーンハム」は、頭が大きく、胴も太く大きい。上下の尾鰭が互いに反対の方向へ巻いている。背は緑色。大きな黒点が胴全体にみられる。最大のものは、約12カムにたつする。「ファ」は頭、「ハーン」は尾の意味である。「クム」はフウチョウソウ科ギョボク属の植物である(*Crateva* spp.)が、「ハム」の意味ははっきりしない。この種の捕獲数は、他と比較して、極端に少ない。

以上の漁師たちによる3種類説は、タイの魚類学者たちに言わせると、結局は大きさの差であるにすぎないようである。つまり、大、中、小のプラー・ブックにそれぞれ別の名称があると解釈される。となると、成長による呼称の変化ととらえることが可能であり、プラー・ブックはいわゆる「出世魚」といえる。

3. プラー・ブック漁に関する儀礼

乾季に入り、水位が下がるとハートクライ村付近のメーコーン河には大きな砂洲が現れ、河原が広がり、土手も長くなる。河は漁が可能な浅瀬になる。漁の最大の獲物はプラー・ブックである。プラー・ブック漁の季節が本格的に到来する前に、村びとたちは漁の安全と豊漁を祈る諸儀礼をおこなう。河の精霊や土地の精霊など漁場の本来の主である精霊たちに向けて、彼らは供物を捧げる。また、漁の舟に宿る精霊たちに向けても供物を捧げる。1996年の場合、4月17日夕刻と18日の午前、これらの儀礼はなされた。ここ5年間の記録によると、プラー・ブックが村で捕れたのは、いずれの年も4月下旬になってからなので、漁が本格化するのは、儀礼後1~2週間してからということになる。

以下では、1996年4月の実地調査における見聞をもとに、これらの儀礼について記述をおこなう¹¹⁾。

11) かつて、ラオスのビエンチャンおよび東北タイのノンカーイ周辺の村において、プラー・ブック漁前に挙行されていた儀礼については、いくつかの記述がある。そこでの儀礼とハートクライ村の儀礼とは、基本的な特徴を同じくしている。すなわち、漁期始めに挙行される点、祠を建て河の霊を招き肉料理で供応する点、引き続いて舟霊儀礼がなされる点などである。ただし、ノンカーイでの儀礼は、つぎの諸点でハートクライのそれとは異なる。たとえば、つぎつぎと場所を変えて連日5日間、さらにプラー・ブックの淵と呼ばれる地で3日間も供応がなされる点、招かれる霊はプラー・ブックのすみかアーン・トーン・ノン・チャオの主であると報告されている点、プラー・ブック捕獲後はプラー・ブックも供する点、舟霊の意向を伺う占いがなされる点、出漁時網に蜜蝋をかける点、下品な言葉を掛け合う点

1) 河の精霊・土地の精霊への儀礼

ハートクライの村びとたちは、毎年、ブラー・ブック漁の前に、あらかじめ漁場の本来の主（チャオ）である精霊たちを招いて、ごちそうを振る舞い、精霊たちの機嫌をとり、安全と豊漁を祈願してきた。彼らはこの儀礼をリアン・チャオ・ティー・チャオ・ナム、あるいはブアンスアンの儀礼と呼んでいる。リアンは「もてなす、ごちそうする」、ブアンスアンは「精霊ないし神を祀る、報酬を約束して懇願する」の意味である。招かれるのは、河の精霊、砂洲の精霊、舟着き場の精霊、土地の主の精霊など多岐にわたる精霊たちである。

1996年の場合、漁開始前の河の精霊などへの儀礼は2回おこなわれた。まず、4月17日の夕刻に土手中腹の祠にて、さらに翌18日の午前中に河原の祠にてもう一度、同じ精霊たちへの儀礼がおこなわれた。今回、直接の観察ができたのは、後者の儀礼のみであったが、前者の儀礼についても、複数の村びとに聞き取りをおこない、その内容をほぼ確認できたので記しておく¹²⁾。

a. 祠

まず、4月17日夕刻の儀礼であるが、その挙行の前には精霊たちの依代となる祠を建てなければならない。ハートクライの寺院前の広場から土手を下りると、河原が広がり、舟着き場になっているが、そこからさらに南（下流）に200メートル余り歩き、やや土手の中腹に上ると、草むらのなかにクライ（*Khrai*：トウダイグサ科カンコノキ属、*Glochidion daltonii*）の木が立っている。村びとたちはその樹下に竹製の簡素な祠を建てる。高さは1.4メートル、幅1.25メートル、奥行き0.7メートルほどで、屋根は草葺きであり、正面がメーコーン河を臨むように建てる（写真12）。この辺りはかつてはたくさんのクライの樹木が茂っていたようで、村の名前（ハートクライ：クライ樹のある浜）もこれにちなんだものである。なお、このクライ樹の地上3メート

などである [DAVIDSON 1975: 182-183; RATCHABANDITTAYASATHAN 1979: 10418-10425]。ただし、ハートクライ村ではかつてブラー・ブックを供物として捧げる習わしがあった（後述318-319頁）。

ノンカーイの儀礼とハートクライの儀礼の相互関係については、検証できなかった。少なくともハートクライの現在の村びとには、ノンカーイ方面からの影響の記憶はないようであった。なお、ハートクライの村びとも対岸ラオス領の村びととは交流がある。ラオス側の村びとは4月12日に儀礼をおこなったようである。

12) 主な情報は、4月19日に、儀礼の祭司（モー・ビー）であるチャン・ヨンユーン氏（62歳）から得たものである。彼からの聞き取りには「ブラー・ブック漁師クラブ」の代表ブンリエン・チナラット氏（49歳）、チャムラット・チナラット村長（52歳）も同席していたので、彼らにも事実関係の確認と補足説明を求めた。また、4月20日には、モー・ビーの助手を務めるスアン・トゥーンチャイ氏（71歳）から補足的な説明を受けた。

ルほどのところに枯れ草などがひっかかっていたが、このことは雨季にはそこまで水位が上がることを示している。むろん祠も水没し、流失してしまう。したがって、毎年儀礼の前に祠を建て直さねばならない。

b. 祭司

クライの樹下の祠で儀礼を執りおこなうのは、モー・ピーあるいはモー・プラームと呼ばれる儀礼専門家である。モー・ピーは呪文（カーター）を操る能力を習得し、その能力でもって精霊の力に対抗することができると思なされている存在である。たとえば、占い師（モー・ドゥー）によって精霊の障りが病因であると判定された病人がいるとする。その病因を儀礼的能力を駆使して取り除き、病人を治療するのが呪医モー・ピーである。モー・ピーが村びとにモー・プラーム、すなわちバラモン系の知識による治療者とも呼ばれるのは、北タイ語のほかパーリ語などインド系の言語による呪文を操ることができるからであろう¹³⁾。なお、モー・ピーは精霊に憑依されることで精霊の託宣を告げたり、精霊と交信する存在とはみなされていない¹⁴⁾。この点で、マー・キーないしコン・ソンと呼ばれる霊媒（巫役）とは区別されている。調査時点のハートクライ村には霊媒はおらず、村における主な儀礼執行者は、モー・ピー、村の守護霊への儀礼の執行役（チャム）、モー・スー・クワン、および仏教の僧侶であった。モー・スー・クワンである年輩男性は、信徒総代（アーチャー・ワット）でもあった。

しかし、こうした儀礼執行者のなかで、ブラー・ブック漁前の河の精霊・土地の精霊への儀礼を執行するのは、村びとによればモー・ピーだけである。もしモー・ピーが村のなかにはいない場合は、どうするのかと問うと、他の村のモー・ピーに来てもら

13) 村びとはクワン（霊質、魂）に関する儀礼の専門家モー・スー・クワンを、プラームと呼ぶこともある。この方が一般的なようである。タンバイアは東北タイ農村の調査記述のなかで、モー・スー・クワンが、パーム（プラーム）と呼ばれていることを紹介している [TAMBIAH 1970: 231, 252]。

14) 調査村のモー・ピーは、キングスヒルの記述にあるモー・カーターとはほぼ同様の儀礼専門家かと思われる [KINGSHILL 1976: 199]。林によれば、北部タイのモー・カーターと東北タイのモー・タムは「精霊の世界にかかわりながら悪霊の追放や人びとへの襲撃・招福儀礼をおこなう目的で仏教の経文を部分的に使用する〈呪医〉の役割を果たす」儀礼執行者である。ただし、林はまた、東北タイではモー・ピーとモー・タムは明確に区別されているとも述べている。つまり、前者はジャーマニスティックな性格をもつが、後者は神がかりになることはなく、また、前者は精霊との交流により診断を下すが、後者は五戒を遵守し、師から文書知識を得て、仏法の力に依拠して、施術活動をおこなうとする。また、中部タイではモー・ピーは悪霊を祓う呪医の総称であると紹介する [林 1984: 83-84]。調査村のモー・ピーは、神がかりになるのではない点で、東北タイのモー・ピーとは異なるようであるが、調査期間が短く資料も充分でないので、即断は避けたい。

い、儀礼をおこなってもらおうと答える。なぜモー・ピーがこの儀礼の執行役なのかは、興味深い点である。たとえば、北部タイ農村の一般の守護霊儀礼においては、定期儀礼執行役に特別な呪的知識が必要であるとは、通常村びとたちは考えていない。ハートクライ村でも、村の守護霊への定期供応を務める執行役は年輩男性ではあるが、とくに呪文を駆使する能力の持ち主でなくともよい¹⁵⁾。しかし、ブラー・ブック漁前の精霊儀礼はそうではない。この儀礼の執行役はある程度の呪的能力の持ち主でなければならない。

この点を考える場合に、いっぽうで重要と思われるのは、この儀礼に招かれる精霊たちが、より強力で危険な自然霊と認識されていることである。村びとによれば、女性は魂が柔弱で精霊に侵入されやすいので、儀礼の場に近づかないほうがよい。儀礼執行はこうした自然霊たちと接する作業なので、執行者は精霊に対抗できるだけの呪的能力をもった男性ということになる。ただし他方、執行者は精霊たちと対抗するだけでなく、同時に、精霊たちと交渉し、それらをもてなすことができる存在でなければならない。この点、本来解脱を志向して戒律を実践し修行を積む仏教の僧侶も、強力な対抗力である法力の持ち主として、災害や悪霊からの護身や健康願いなどの呪術的实践に携わらないわけではないが、こうした自然霊をもてなす儀礼の執行役にはふさわしくないということであろう。同じく、モー・スー・クワンも悪霊祓いはおこなうが、精霊をもてなす儀礼には関与しない。

現在、ハートクライ村にはモー・ピーは2名いる。C氏(62歳)とJ氏(66歳)である。当村のモー・ピー2名はいずれも^{しんみ}沙弥としての出家経験のある人物で、その経験は、呪文という文字的知識の習得とある程度関連すると思われる。J氏はC氏に呪術的知識を教えた師(クルー、クー)であり、従来は彼がブラー・ブック漁前の精霊儀礼を執りおこなってきたのだが、今は健康を害している。C氏がJ氏に代わって儀

15) 調査村では、村の守護霊チャオ・ポー・ターオ・ベットへの定期儀礼のさいに供物を捧げる役割を担う祭司を、チャムと呼んでいる。北部タイでは通常、村の守護霊への供応儀礼の執行役を、コン・タン・カーウなどと呼ぶ。チャムという呼称は、東北タイ農村で通常使われている [TAMBIAH 1970: 267; 赤木・竹内 1987: 122-131]。この点は、メーコーン流域のこの村と、下流や対岸のラーオ文化とのつながりを思わせる。また、村の守護霊チャオ・ポー・ターオ・ベットのターオ・ベットという名前は、当村でブラー・ブック漁を始めたと言い伝えられている漁師ターオ・ベットと同名である。村びとは両者の関連を否定するが、興味深い。

村の守護霊への定期供応では、鶏4羽、焼酎、ロウソク、線香、ご飯が供えられる。チャオ・ポー・ターオ・ベットの祠は村内にあり、2.5メートルほどの高さのあるかなり大きなものである。祠のなかには人が両腕を広げた長さの竹棒が立て掛けてある。チャムは儀礼のさい、この竹棒で守護霊が来臨したかどうかを調べるという。竹棒が若干伸びれば、それが守護霊が祠に来たしるしだそうである。祠内には入試合格祈願の紙が多数吊してもあった。

礼をおこなうようになったのは、2年前からである。儀礼執行役に任期があるわけではなく、モー・ピーとして活動できるかぎり、役を続けていくことになる。儀礼執行者は2人の助手と手分けして供物を祠に供えるのだが、助手はモー・ピーでなくともよい。プラー・ブック漁前の精霊儀礼をおこなう C 氏の助手を務めている2名の男性年輩者、S 氏 (71歳) と K 氏 (60歳) は、いずれもモー・ピーではなかった。

c. 供儀と願かけ

さて、儀礼当日、モー・ピーとその助手2名のほか、「プラー・ブック漁師クラブ」(後述)のメンバーの男たちは、祠に向かう。生きた豚1頭を引き連れ、焼酎1本、モチゴメのご飯、赤布白布、ビンロウ(ヤシ科, *Areca catechu*)の果実、キンマ(コショウ科コショウ属, *Piper betle*)の葉、ロウソク、線香、花などの供物をもって行く。豚を祠の前で殺し、そこで解体調理する。準備が整うと、まずモー・ピーは、自らの師の霊を招き、ロウソク4対(8本)と花の入った盃と焼酎1本を捧げて、敬意を表す。そして、「どうか、師たる先生よ、ここにいる私たちすべてが、精霊たちに悪さをされないように守ってください」と祈願する。そして、焼酎を注ぐ。儀礼執行者はもろもろの精霊たちの攻撃にさらされる危険があるので、その間彼らが自らの身を護り、滞りなく所期の目的を遂行できるよう、師の助力を請うのである。C氏は、彼の師にあたるJ氏の霊に対して、この表敬儀礼をおこなったと述べている。

そして、モー・ピーたち3人で手分けして、調理した豚とその他の供物を祠に供え、精霊たちを招き、願いの言葉をのべ、焼酎を注ぐ。その間、他の者は一歩下がったところでしゃがみ、供応の様子を見守る。その後、参加者たちで供物を食べる。残りはもち帰られ、立ち会わなかった漁師たちにも配られることになる。

以上、この儀礼では、生きていた家畜が祠まで連れて来られ、その場で殺され、解体調理される。人びとは犠牲を供え、豊漁祈願をおこなったのち、その場で共食する。そこには供儀儀礼の形態がみとれる。この点はタイ系民族の多くの精霊儀礼が共有してきた特徴といえる【田辺 1993: 37】。

モー・ピーは、儀礼においてつぎのように精霊たちに話しかける。「どうぞ、河の霊(チャオ・ナム、チャオ・メー・コンカー)、舟着き場の霊(チャオ・ター)、森の霊(チャオ・パー)、国の霊(チャオ・ムアン)、砂洲の霊(チャオ・コ)、微高地の霊(チャオ・ドーン)、土地の霊(チャオ・ティー、チャオ・プラ・クウェーン・デーン・ティー、メー・トラニー)たちよ、ここに集い来てください。プラー・ブックの国からプラー・ブックを連れて来ててください。どの舟の網にもプラー・ブックが

かかりますように」。そして、プラー・ブックが捕れば、さらに供物を供える約束する。「願かけ（ボン・バーン）」である。プラー・ブックが捕れば、お礼に約束の供物を供える。供物は通常、鶏2羽と焼酎1本だが、豚の頭や水牛の生肉料理ラープを供える場合もある（現在では、プラー・ブックの肉を供える必要はない）。もう1尾捕れるとまた供物を供える。同じ供物が後述の舟霊にも供えられる。願かけが効き、望む結果がでた場合におこなう、こうした供儀は「願解き（ケー・ボン）」と呼ばれる。プラー・ブックが捕れた回数分、お礼の供儀が祠にておこなわれる。願解き儀礼挙行の時間帯は、とくに決まてはいない。

以上が、4月17日夕刻におこなわれた供儀の概要であるが、ここで念を押しておきたいのは、供物はプラー・ブックに対して捧げられるのではなく、河や土地の主（チャオ）である精霊（ピー）たちに捧げられるという点である。村びとによれば、プラー・ブックは「精霊ないし神である主（チャオ）に仕える魚」ではあるが、精霊や神そのものではない。プラー・ブックの体の両側面には、主が自らの所有物であることを示すために押印した「ワ」と呼ばれる黒い斑点が5つずつあると話す者もいる。メーコーン河の水中には巨大な洞があり、主の宮殿になっているともいう。

村びとたちは供儀をおこない、河や砂洲のもともとの主であると彼らが考える精霊たちのご機嫌をとるが、これは自然そのものである河や砂洲を、漁場として自らに意味づけなおす行為ではないかと思われる。このようにすることで、予測不可能な自然の力による妨害の懸念を払い、その力がむしろ味方してくれることを期待しながら獲物であるプラー・ブックを追うのである。

なお、この供儀はつぎの変遷を経て、現在に至っている。

まず、現行では後述の「プラー・ブック漁師クラブ」が供物の準備やモー・ピーへの儀礼執行依頼をおこなう社会単位であるが、少なくとも1940年代以降、1987年に村の漁師全体が同クラブに組織化されるまでは、村の漁師たちの班（カナ）は4つあり、各班を統一する組織はなかった。プラー・ブック漁前の儀礼は、それでも4班の合同でおこなわれていた。それぞれの班の長が集まって、供物を用意し、儀礼をモー・ピーにおこなってもらっていた。ただし、班の個別性はプラー・ブックが捕れた時の願解き儀礼には、はっきりと表れた。当時はプラー・ブックを捕った班の人びとだけで願解き儀礼をおこなっていた。

つぎに、当時は供物の内容も現行の儀礼と異なっていた。すなわち、プラー・ブック漁前の儀礼では、鶏2羽を供儀し、その他焼酎1本、スイと呼ばれるバナナの葉を巻いて作った円錐形の容器に、ロウソクと花、ビンロウの果実とキンマの葉を詰め

たもの4本が供されていた。4本のスアイはそれぞれの班を表していた。また本来は、その年の最初に捕れたブラー・ブックを、願解き儀礼の際に供物として捧げる習わしであったが、1970年代後半からバンコクの商人がブラー・ブックを買い付けに来るようになり、ブラー・ブックはすべて売却され、代わりに願解き儀礼においても鶏が供されるようになったと述べる村びともいる。漁前の儀礼の供物が、鶏から現行の豚に変更された背景には、1980年代のブラー・ブックの売値の高騰がある。1970年代後半においてキログラムあたり30パーツであったブラー・ブックの売値は、80年代末にはキログラムあたり200パーツに跳ね上がっていた。経済的に潤った漁師たちは、ブラー・ブックの捕獲に助力してくれた河の精霊等に感謝を表すべく、供物を格上げしたのである。供物の変更は、儀礼が2度挙行される形に変更されたのを機会になされる。前述した土手中腹の祠での従来の儀礼に加えて、翌日河原でもう一度同様の儀礼がおこなわれるようになったのは、1980年代中頃のことである。

d. 儀礼の再演と公開

では、ブラー・ブックが捕れたわけでもないのに、なぜその翌日の午前に河原でもう一度儀礼がおこなわれるようになったのであろうか。

村長等はその経緯をつぎのように説明する。すなわち、まず観光資源としてブラー・ブックに注目し始めていた県や郡が、村の伝統行事の振興を図るよう、村に要請してきたのである。それを受けて村びとの集會が開かれ、話し合いの結果、河原での儀礼が挙行されることになる。彼らによれば土手中腹のクライの樹下の祠での儀礼は、従来からおこなわれてきた漁師たちのためだけの豊漁祈願の儀礼であり、翌日の儀礼は一般の村人たちや増加する見物人に配慮しての再演であるという。大勢がみることのできる、行き来のしやすい広い河原で、同じ趣旨の儀礼を、ただし、派手に再び演じるようになったのである。行政による広報活動もあり、1990年と91年はとくに大勢の見物人が集まると、村びとは述懐する。1996年4月18日におこなわれた河原での精霊儀礼について、筆者等は観察することができたので、以下にその内容について記す。

この日の儀礼には、推定3,000人の見物人が河原から土手いっぱい集まった。最初に「ブラー・ブック漁師クラブ」の代表による儀礼の説明が観客に向けてなされ、その後、河の精霊と土地の精霊への儀礼が再演された。

この日の儀礼のための祠は、河原の舟着き場の横に前日に建てられている(写真13)。雨季の増水で流されるので、毎年新たに建てなければならない点は、前述の土手中腹の祠の場合と同様である。やはり竹製だが、高さ2.3メートル、幅1.3メートル、奥行

き1.7メートルと土手中腹の祠よりも大きく、派手に飾られ、見栄えのするものになっている。高さ0.5メートル、幅2.5メートル、奥行き2.7メートルの竹組の柵で囲まれて、竹柵の4隅にはバナナの幹とサトウキビが立てられ、竿旗なども飾られている。

祠の下には、モー・ピーが師への表敬儀礼をおこなうときに使う盃（カン・クルー）がおかれている。盃には線香、ロウソク4対（8本）、花、100パーツ紙幣、コップが入っており、傍らに焼酎1本がおかれている（写真14）。祠のなかには数多くの供物がすでに所狭しと並べられている。豚の頭2つ、鶏4羽、焼酎8本、ご飯のほか、スイカ、ココヤシ、マンゴー、バナナなどの果物、ゴザ、三角枕、三段作りのバナナの葉製の吉祥飯パーイシー、花飾りなどである。また、バナナの葉を円錐形に巻き、線香、ロウソク、花を挿したスアイを多数盛った大皿がおかれている。供物の種類そして量も前日の儀礼と比べてかなり豊富である（写真15）。

午前10時45分頃、郡長がロウソクを灯し、線香を焚いて、3度礼拝をおこなう。つぎに、モー・ピーと彼の助手の計3名が祠の前に進み出て、前日同様、まず師の霊に敬意を表し、精霊たちから身を護ってくれるように助力を請い、豊漁の祈願をおこなう。モー・ピーが「ただ今、お供えをいたします。どうぞ、河の霊、大地の霊、土地の霊、砂洲の霊、微高地の霊……みんな一緒に集い来て供物を受け取ってください。豚の頭2つに鶏2対、焼酎8本、ミカンに菓子、ビンコウの果実にキンマの葉、バナナにサトウキビ、すべてお供えします。どの舟にも、どの舟にも運と福を確実に賜りますように」と唱える（写真16）。そのあいだに、助手2人が焼酎を1杯ずつ祠に注ぎ、豚肉、鶏肉、モチゴメのご飯を少しずつつまみ、混ぜて握って、小団子状にし、バナナの葉の皿に入れておく。村の女性たちが黄色と黒色の派手な服装で現れ、祠の前で「ビルマ風の求愛の踊り」を踊り、招かれた精霊たちを楽しませる（写真17）。このあいだ、約5分あまりで儀礼は終了する。

河原で再演された儀礼は、前日の儀礼と異なり、祠の装飾が派手になり、供物の種類や量が豊かになり、踊りの奉納も加わって、大掛かりなものになっている。ただし、儀礼じたいは時間も短く、それだけで見世物として成立するほどのものではない。引き続いておこなわれる舟霊への儀礼、プラー・ブック漁船の出漁そして競舟行事がワン・セットとなり、そのイベントが最暑季タイ正月ソクラーンのお祭り気分の雰囲気なか、納涼にうってつけのメーコーン河の水辺でおこなわれるがゆえに、見物人を吸引するのであろう。

2) 舟霊儀礼

河の精霊・土地の精霊への儀礼に引き続いては、舟に宿る精霊をもてなす儀礼（リアン・マー・ヤー・ナーン）がおこなわれる。村びとは、漁場の本来の主にも助力を請うた後、今度は漁撈のパートナーである舟の霊にも助力を請うのである。

すでに早朝、河原の祠近くの波打ち際に泊められた1艘の舟の「船首部」には、儀礼用のさまざまな供物が並べられ、準備は整っている。蒸した鶏2羽、焼酎1本、モチゴメのご飯2握り、花、線香、女性用の巻きスカート布、櫛、口紅、手鏡、首飾り、腕飾り、髪の毛の束、白粉である。また、バナナの葉を円錐形に巻いて作った細長い入れ物（スアイ）4本を、串に刺して連ねた供物が3揃えおかれている。4本のスアイのうちの2本にはロウソクと花が挿してあり、他の2本にはビンロウの果実とキンマの葉が詰めてある。そのほか、線香と変葉木（*Croton* sp.）の葉を挿したスアイが30数本大皿に用意されている（写真18）。もてなされるのは、マー・ヤー・ナーンあるいはナーン・マイと呼ばれる精霊である。樹木の霊ナーン・マイは、樹木が丸木舟に加工されるさいに、供応を受け、舟霊として祀られる。通常、マーは母、ヤーは祖母を指す関係名称であり、ナーンが女性の意味であることから明らかなように、舟霊（マー・ヤー・ナーン）は女性の精霊とされており、女性が好んで使う品じなが供物として捧げられる。

午前10時50分頃、モー・ピーたちは、河の精霊と土地の精霊への儀礼を終えるとともに、祠のなかの大皿に盛ってあった多数のスアイを携えて舟のところへ行き、舟の精霊への儀礼にとりかかる。まず、用意されたモチゴメのご飯に、蒸した鶏肉をまぶして握り、小団子を6つ作って、舟の「船首部」におき、スアイの串を添える（写真19）。そしてつぎのように祈願しながら、焼酎を注ぎかける。「本日、私は鶏1対、焼酎に髪、鏡に櫛などたくさんの品じなをもって、マー・ヤー・ナーンをもてなしに参りました。どうぞ、おいでになり、鶏や焼酎を食してください。そして、プラー・ブックが捕れるように手助けしてください」。さらに同様に、舟の「中央部」、「船尾部」にもスアイの串をおき、焼酎を注ぐ¹⁶⁾（写真20）。この3箇所には舟霊のクワン（霊

16) このほか舟霊に関しては、毎年漁期の初めに「舟の悪運を祓う儀礼（パット・ルア）」がなされる。モー・ピーやモー・スー・クワンに頼んで、漁師は自らの舟に儀礼を施してもらう。モー・ピー等は、鶏2羽・焼酎・ソムボーイ水・ロウソク・花・ビンロウジ・キンマの葉などを供え、悪運を祓う呪文を唱える。また、プラー・ブックが捕れれば、前述のように河の精霊等に願解きの供応がなされるほか、「舟霊を慰労し、舟にしっかり結び付ける儀礼（ブーク・クワン・マー・ヤー・ナーンあるいはマット・マー・ヤー・ナーン）」が舟着き場でおこなわれる。通常プラー・ブックを捕った漁師は、得たお金から500バーツくらいの謝礼を儀礼執行者に渡すという。これらの儀礼は、仏日（ワン・ブラ）を避けておこなわれる。

質、魂)が宿っているとされるからである。そして、大皿に盛られたスアイを舟子たちに配る。舟子たちは、チエンコーンのハートクライ村プラー・ブック漁師クラブの文字とプラー・ブックのイラスト入りの揃いの藍色の作業服を着ているが、そのポケットにスアイを挿す。すべての舟にナーン・マイは宿っているとされるが、供儀儀礼は最初に出漁する舟の上でおこなわれる。他の舟にもスアイが配られ、それによってすべての舟霊への供儀がなされたことになる。この儀礼も所要時間は5分たらずである。舟霊への儀礼に引き続いて、この日はプラー・ブックの稚魚の放流行事もおこなわれ、その後プラー・ブック漁の舟が出漁した。

以上、1996年4月に筆者等が見聞したハートクライ村のプラー・ブック漁に関する儀礼について記述した。1980年代中頃から河の精霊・土地の精霊への儀礼が、翌日に一般の見物人向けに再演されるようになった。再演儀礼は従来からの儀礼に比べて派手なものになり、プラー・ブック漁は、ハートクライの村びととメーコーン河のあいだでの、季節限定の恵み、プラー・ブックをめぐる交わりという従来の性格に加えて、観光行事としての性格を帯びるようになってきた。さらに、近年は稀少な生物種の保護のキャンペーン行事という要素も、これに関連して加わってきた。ハートクライの河原の前の土手上には、「世界で初めてプラー・ブック人工繁殖に成功した地」と書かれた記念碑が立っている(写真21)。プラー・ブックと人びとのかかわり方が変化するなかで、漁に関する儀礼の性格も大きく変わってきており、観光行事、稀少生物保護キャンペーン行事の1コマになりつつある。

ただし、村びとは河原で公開儀礼をおこないながら、従来の供儀儀礼を前夕に自分たちだけでおこない続けてもいる。儀礼が今日風に変化すれば、それ以前の儀礼の型は廃れてしまうことも少なくないが、ハートクライの村びとたちは従来の儀礼と外向きの儀礼を使い分けている。考えてみれば、こと漁に関して、プラー・ブックと村びとたちとの力関係はそうは変わっておらず、それゆえにプラー・ブックの漁果にかかわる自然の精霊たちや舟霊との交渉は、いまだ村びとたちにとってある種の切実性をもち続けている。村びとに現金収入が必要になり、プラー・ブックがより稀で高価になった分、漁にかける願い、そして儀礼にかける願いは、より切実になり、精霊たちとの真摯な交渉の場はいまだ必要であり続けるのであろう。

背の高い草むらに囲まれ、外からはみえないひっそりと孤立したクライ樹の下での精霊たちを相手とした伝統的な儀礼に加えて、翌日に河原のオープン・スペースで観光客=人間を相手に、より盛大な儀礼をおこなう。この儀礼の再演ないしは見せ物化をどうとらえるかが、問題になる。

当然のことながら、再演儀礼の意味は前日の伝統的儀礼とは異なる。官庁主導で開始されたといわれる再演儀礼の目的はショーであり、観光客の目を楽しませることにある。つまり、再演儀礼は、プラー・ブックの豊漁を願うよりも、遠来の客をもてなすためのものである。再演儀礼に伝統的儀礼を統合できないところに、村民の悩みがある。村民にとって、村の象徴でもあるクライ樹の下で執りおこなう儀礼でしか、諸精霊を招来することができないのであろう。われわれの目の前で展開する盛大な儀礼は、官庁や観光業者などの要請に、村民が熟慮の末に呼応し、演じている「芝居」ととらえることが可能である。

前日に豊漁を願う本来の儀礼がすでにおこなわれていることを知らない観光客は、村民が演じている「芝居」を儀礼として観ているのである。今後、この「芝居」はますます盛大になることが予想される。しかし、そのいっぽうで本来の伝統儀礼も根強く執りおこなわれていくであろう。つまり、それは「儀礼の再演」というより、「儀礼の分化」としてとらえるべきものかもしれない。

Ⅲ. プラー・ブック漁をめぐる社会関係

プラー・ブックは、前述の通りメーコーン河にのみ生息する魚であるが、その存在はただ単に漁撈にとどまらず、チェンコーン郡を中心としたこの地域社会にさまざまな影響を与えている。ここでは、プラー・ブック漁がいかなる社会関係を必要とし、それがどのように変化しようとしているかを中心に考察する。具体的には、プラー・ブック漁師クラブおよびチェンコーン郡のプラー・ブック政策などについてのべる。

1. プラー・ブック漁師クラブ

聞き取りをおこなった限り、入漁権といった考え方はどうやら存在しなかったようである。その点についてはほかの社会慣行と比較するなど、より詳細な検討が別に必要であろうが、漁をする者は大体ハートクライ村の村民に自ずと限られていたという。つまり、村民であればだれでも漁をおこなうことができた¹⁷⁾。ただ、この漁は個人ないしは1家族ではなかなか困難な作業といえる。ソー・チナラートの話によれば、1930年代末頃には村内に4つの漁師グループ（班）があり、それぞれのグループが木

17) 対岸のラオス側の村民も捕獲する者がいるが、ハートクライ村との昔からの交流が基盤となっており、出漁できる村民名は自ずと了解されているという。ちなみにラオス側の問題点は、プラー・ブックの買い手が少ないうえに、販売価格が低いことであり、ラオス側住民は捕獲した場合にもタイ側で売ることが多い。

をくり抜いた丸木舟を1艘所有していた。豊漁を願う儀礼の執りおこないもふくめて、すべてがこの4グループの話し合いで決められたという。このグループが村内でいかなる位置にあり、社会的にどのように認知されていたかはわからない。この4グループ体制は、プラー・ブック漁師クラブが発足する1987年まで続いてきたようである。

ただ、村内の有力家系がこれらのグループに参加していたであろうことは、ハートクライ村の村社に祭られている守護霊の名が、先にのべたプラー・ブックをこの村で最初に捕獲したという伝説的人物ターオ・ベットと一致していることから推測可能かも知れない(写真22)。

いずれにしろ、1987年はプラー・ブック漁をめぐる社会的環境が変化した年といえる。その契機となったのは、意外にも、4年前の1983年5月8日に成功したパヤオの水産試験場研究員によるハートクライ村でのプラー・ブックの人工授精であると考えられる。人工授精の成功はマスコミにより大きく取り上げられるなど、水産学的な快挙であったことは申すまでもないが、このことによりプラー・ブックの社会的位置が地方レベルから全国レベルに拡大したことに注目する必要がある。

その具体的拡大は、ふたつの方向に表れた。ひとつは、この稀少価値のある魚に対する需要の拡大である。バンコクやチェンマイなどのレストランからの注文が、このころから、急激に増えてきた。牛肉にも匹敵するほど美味しいという噂や物珍しさが、プラー・ブック消費者の増大につながった。とくに、諸葛孔明の生まれ変わりであるとする華人系タイ人のあいだの信仰は、この傾向に拍車をかけた。たとえば、1989年に捕獲された60尾のプラー・ブックの35%にあたる21尾を買い占めたのはバンコクの著名なレストランであった [WFT 1995: 19]。ふたつには、ツアーリズムの浸透である。謎を秘めた巨大珍魚、素朴な儀礼、勇壮な捕獲といったプラー・ブック情報が人びとの関心を買いはじめ、全国紙などで紹介されると、北部タイはもちろんのこと全国から観光客が集まり始めたのである。捕獲時期が、奇しくもタイ最大の観光シーズンであるタイ正月(ソクラーン水かけ祭り)と一致していることが、これに拍車をかけた。真夏の暑さのなかで、人びとは一時の涼を求め、河原で繰り広げられるイベントに参加し興じ、巨大珍魚の捕獲を期待するのである。こうしたプラー・ブックをめぐるふたつの社会的変化は、大きくは、1980年代後半からのタイ経済の異常なほどの高度成長に支えられていたことを付言しておく。

さて、1987年の「ハートクライ村プラー・ブック漁師クラブ」の設立に話をもどそう。このクラブ設立の背景には上にのべた社会的変化を指摘できるが、その明瞭な直接的契機は、プラー・ブックの売値の維持である。従来は各グループ(班)でそれぞれ

れが捕獲し販売していたのであるが、それでは買い手市場になりやすく、売値を叩かれ利益につながらない事態が生じてきた。その問題の解決策として、4班を統合してクラブを設立し、売価の設定権をクラブにゆだねる方法をとったのである。

こうして、価格の決定権はクラブに移行された。毎年、漁期のはじめに、会員たちが集まりその年のブラー・ブック売価を決定する。ブラー・ブックを捕獲した漁師はその販売をクラブに委託する。買い手と交渉するのはクラブの仕事である。取引が成立すると、クラブで決めた協定価格分が漁師に支払われ、実際の取引価格との差額分がクラブの収入になる¹⁸⁾。

1987年に発足したクラブは、実は「タイ国ブラー・ブック漁師クラブ」という名称であり、組織も未整備であった。ただ、表2にみるように、ブラー・ブック漁に従事する村民（クラブ会員）の数が、やはりこのころから増加し始め、組織整備は急務となった。約3年かけて、1990年に名称を「ハートクライ村ブラー・ブック漁師クラブ」と変更し、会則も改善された。以後、クラブ体制が確立し、ブラー・ブック漁はクラブの独占指導下におかれるようになる。

クラブへ入会できるのは、原則として、ハートクライ村の住民に限られる。10歳以上であれば、だれでも加入できる。現在の会員は180名（すべて男性）で、69世帯に及んでいる。それは、この村の総世帯数190世帯の約36%にたっし、男性住民（総数約470名）の約40%を占めることになる。69世帯はそれぞれ1艘の漁船を所有しており（表2）、家族の成員を主体とした構成からなる3、4名の舟子が舟に乗り込んで操業をおこなう。舟や網などの漁具の類は各世帯の所有物であり、修理代なども個人負担が原則である。もっとも、儀礼の費用など、クラブ全体にかかわることがらにはクラブが支出する。

クラブの代表は2年任期で再選が可能となっている。1987年にクラブができて以来、クラブ代表はブンリエン・チナラート（49歳）が連続して務めている。ここで、留意

表2 ハートクライ村におけるブラー・ブック漁船数の変化

年	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
舟数	5	18	20	24	40	62	72	80	63	69

18) ハートクライ村でのブラー・ブックの価格は、1988年の約170パーツ/キログラムであったが、1995年には約300パーツ/キログラムになっている。この村を離れ、切り身で売られる場合は500-600パーツ/キログラムであり、レストランには10万パーツ/尾で売られることもある。その価格で仕入れたレストランの実際の売価はさらにその3倍くらいになるといふ。

しておかねばならないのは、「チナラート」姓系の突出した存在である。これまでに何度も言及したソー・チナラートは、弟のター・チナラートとともに12歳のころからブラー・ブック漁を始めて、今でこそ一線を退いてはいるが、数年前までは名手として名を馳せ、この村のブラー・ブック漁をリードしてきた人物である。今日でも、彼の言動がもつ影響力は大である。また、ハートクライ村の現村長はチャムラット・チナラート(52歳)で、これまたチナラート姓である。短期間の滞在であったため、ソー・チナラートとクラブ代表のブンリエン・チナラートが従兄弟関係にあたること以外は、村落の親族関係などの調査はできなかったため断定はできないが、このブラー・ブック漁において指導的地位を長年占めてきたチナラート姓系が、村落の政治的リーダーシップをも掌握していると推測できるであろう。

2. プラー・ブック政策の浮上

今日、ブラー・ブック漁およびそれにかかわる一連のことは、このチェンコーン地域の最も重要な公共財ともいえる。とりわけ、昨年から今年にかけて公共財であるとの認識が強くなってきており、ここにきてブラー・ブック漁はハートクライ村ないしはクラブのみの守備範囲から離脱する傾向を帯びてきている。それは、ブラー・ブックをめぐる社会関係の新展開への兆しとみるのが可能である。

新しい展開への原動力は、先にのべたブラー・ブックの社会的位置の地方レベルから全国レベルへの拡大傾向のより一層の強まりと捕獲数の減少傾向または種の保存とのあいだの矛盾にある。食べ物としてのブラー・ブック需要は衰えをみせないし、この地域の観光客寄せの道具としてはブラー・ブック漁とそれにかかわる一連の行事はますますその価値を高めてきている。1980年代中頃から儀礼が「見せ物」化し、「儀礼の再演と公開」がおこなわれるようになってきたことは、すでに触れた。チェンコーン郡長(ブンソン・テーチャマニーサティット)へのインタビューによれば、ブラー・ブック祭および精霊儀礼は郡の観光振興と経済開発という目的を有しているとし、明らかに地域開発戦略上に位置づけられていることがわかる。

そのいっぽうで、近年捕獲数に減少傾向がみえ、ブラー・ブックの絶滅の危機が指摘され始めている。たとえば、ダム建設を代表例とする目白押し of メーコーン河総合開発プロジェクトによる環境変化が、ブラー・ブックの生存環境を破壊している可能性が高いというのである。しかも、その生物学の実態の解明は遅々として進んでいない。したがって、ブラー・ブック保護のためにどのような有効な方策があるのかすらわからない。唯一とられている人工孵化による稚魚の放流も、前述のような理由など

により実際の効果については各方面から疑問が出されている。1995年5月4日には、漁師クラブ代表、観光団体代表、自然保護団体代表等から6名が参加し、ハートクライ寺院で会合をもち、結果を「メーコンオオナマズ保護のための予備的勧告」として発表し、その保護策へ早急に取り組むよう警鐘を与えている [WFT 1995: 36-44]。

つまり、今日では、プラー・ブックをめぐる「漁師（村民）の所得を確保し、地域振興に役立て、しかも種の保存を図る」というやや三昧的な課題の解決が要求され始めているといえよう。

実際、今年（1996年）の場合、現国王ラーマ9世王の即位50周年祝賀行事への参加を兼ねて、「愛するプラー・ブック、愛するチェンコーン、祝即位50周年計画」と銘打った例年とは異なった企画が、チェンコーン郡主導のもとで、実施された。その具体的内容の核心は、「プラー・ブック種保存基金」（原資30万バーツ）である。この基金を運用し、漁師が捕獲したプラー・ブックを買い上げ、その半数以上を河へ戻したり¹⁹⁾、人工繁殖を促進し毎年10万尾以上の稚魚を放流するとともに、プラー・ブックの生態調査を推進するという計画である。買い上げや河への戻しなど、一部はすでに実行されているし、プラー・ブック保護センターをメーコン河に設ける構想なども策定されている。

この基金の運営委員会は、ハートクライ村プラー・ブック漁師クラブ、水産局、チェンコーン郡、チェンコーン郡商工クラブ、タイ国観光機構、各種自然保護団体など官民の関係諸機関ないしは団体で構成されており、その顔ぶれをみても先に指摘した課題を反映していることが十分に推察される。この基金活動は、今年の3月に始まったばかりで、その実際の効果のほどはまだわからないが、プラー・ブック政策の新しい方向を目指しているといえる。それは、もはやハートクライ村レベルのみではプラー・ブック問題を処理できなくなったことを示している。今後、プラー・ブック漁はどのような社会問題をはらみながら展開していくのか。注目に値する。

19) 今年から始められた「河へ戻す計画」の第1号は、4月27日に捕獲された180キログラムの雄であった（これは今年2尾目。最初の捕獲は4月25日）。チェンラーイ県の有力者が4万6000バーツで買い上げ、そのお金は基金に入れられた。

ところで、今年の捕獲の成果は、タイ側5尾、ラオス側2尾であった。その捕獲数の少なさの原因として、興味深いことに、今年から始まった「河へ戻す行為」による何らかの精霊の祟りをあげる村人がいた。

おわりに

漁撈民族学、あるいは民族（民俗）魚類学は、人類と魚類のさまざまなかわりを記述・分析する研究領域である [秋道 1995b]。本論では、メーコン河水系に固有の大型ナマズであるプラー・ブックをめぐる民族魚類学的な考察をおこなった。

序論でのべたように、東南アジア地域にかぎると、海域における漁撈民俗や民族（民俗）魚類学の研究は比較のみられるが、淡水域における研究はみるべきものがない。その理由のいくつかとして、淡水域における漁撈が海水域の漁撈にくらべて、（1）広範囲の移動や大規模な漁具・漁法をかならずしもともなわないこと、（2）農業との兼業的色彩が強いこと、（3）乾季と雨季による季節性の影響をうけやすく、生業活動としても副次的傾向が強い、などの点を指摘することができる。

こうしたなかで、プラー・ブック漁は淡水漁撈民俗の研究対象としてはたいへん興味ある事例を提示している。そのわけは、まずプラー・ブックそのものが世界でも最大級の大きさを有する淡水魚であり、成熟個体で全長2.5メートル以上、体重250キログラム以上にたつする点や、その生態や食性については不明な点が多く、いまだ解明されていない部分が多い「未知の魚」であるからといえる。

もちろん、その巨大さやミッシング・リングをもつプラー・ブックの生態研究の現状だけが、注目をあつめた要因であるのではない。プラー・ブックは美味であり、地元を始めバンコクにおいても高い市場価値をもつ。このことから、商品生産のための漁業、すなわち商業漁業として地元の人びとの経済的関心を得た点を見逃すことはできない。現にここ10年のあいだに、プラー・ブック漁をおこなう班の数は1987年以前と比較すると飛躍的に増加した。1996年現在、70近くの班がプラー・ブック漁に従事している。

プラー・ブックの漁場がメーコン河の限られた水域にあり、しかも乾季とはいえ流速のある河川中央部に網目30センチメートル、長さ200メートルの大きな刺網をさす方法を用いるため、漁師間の競争と混み合いが生じるのは必然であった。そのため漁場利用の順番を抽選できめる方法がとられている。

こうしたなかで、プラー・ブック漁とその変化をさまざまな社会的・文化的な局面で知ることができる。その第1は、儀礼にみられる二重化傾向である。すなわち、プラー・ブックの初漁に先立ち漁業関係者や呪術的な職能者によって専門的におこなわれてきた豊漁のための精霊儀礼、舟霊の儀礼などに加えて、精霊儀礼が大衆や観光客

の前でいわばデモンストレーションとして実践されるようになった。儀礼の再演は、ブラー・ブック漁の観光化と全国的な関心の高まりを表しているといえよう。

第2は、ブラー・ブック漁に従事する個人や集団における規律や資格を社会的にきめるうごきがみられる点である。これは1987年に「タイ国ブラー・ブック漁師クラブ」として発足し、先述した漁場利用のくじ引き制、販売の規制などの面で社会的な拘束力を行使することになった。しかも、このクラブは地元の開発と発展、観光客の誘致などを推進する中核的な役割を担っている。クラブのメンバーによるブラー・ブック漁のロゴマーク入りの伝統的農民服風の作業服の着用は、そうした動きの顕著な表れである（写真23）。

第3は、ブラー・ブックの乱獲傾向に対する社会の側からのうごきである。そのひとつは、タイ国政府農業・協同組合省水産局による人工孵化事業の推進であった。この事業は、1981年に開始され、1983年からは人工授精による孵化と稚魚の放流が軌道に乗り出した。資源の安定化を図るとともに、漁業そのものを規制する運動が顕在化し始めたことは、環境問題への関心の高まりやワシントン条約により国際的な商取り引きが禁止されているブラー・ブックへの保護運動とみなすこともできる。

こうした一連の動きを反映して、1996年における現国王即位50周年祝賀行事の一環として、「ブラー・ブック種保存基金」が設立された。これには、ブラー・ブック漁師クラブ、水産局、チェンコーン郡とその商工クラブ、タイ国観光機構、自然保護団体などが参加しており、捕獲されたブラー・ブックの買い上げと再放流、人工孵化、稚魚の放流などを画策している。

以上のように、ブラー・ブックと北部タイ住民とのかかわりは、経済、社会、儀礼、環境など複合的な領域にまたがっている。しかも一地域をこえた問題のひろがりを見せていることはきわめて明らかである。

いっぽう、漁撈民俗の研究対象としてみた場合、ブラー・ブックをめぐる豊漁儀礼についてかならずしも十分な位置づけをすることができたわけではない。これまでの記述からも明らかなように、ブラー・ブック漁に先立つ諸儀礼は、いずれもタイもしくは北部タイに特徴的な様相を示している。しかし、河や砂洲、舟などの諸精霊に豊漁を祈願し供物を捧げる儀礼的ないとなみだけにブラー・ブックと人間とのかかわりが凝縮されていると説明することがはたしてできるだろうか。ブラー・ブックのような巨大で謎を多くもつナマズに対して、人びとが畏怖の念とか神聖なものとする観念をまったくもつことがなかったのであろうか。もしそうであるとすれば、ブラー・ブック漁の儀礼になぜそのような人びとの思いや観念が表出しないのであろうか。

世界中の狩猟民や漁撈民のなかには、たとえば大型の獣や魚に対する特定の観念をもち、人間世界と野生世界との交流の場として豊漁（猟）儀礼や供儀儀礼をおこなう例が知られている²⁰⁾。すでに触れたように、東北タイのウボンラーチャターニー県パーテムの新石器時代の岩壁画には、プラー・ブックと思われる巨大なナマズが描かれている。これは、タイの精霊儀礼にみられるのとはおそらく異質の動物観、自然観が、岩に向かってナマズの絵を描いた当時の人びとの観念世界に存在したことを暗示しているのだろう。残念ながら、今回の調査では、プラー・ブックの儀礼にはたしてそのような側面をみいだし得るのかどうかについて確証を得ることはできなかった。プラー・ブック漁とその儀礼が特異的であるだけに、この問題は今後重要な課題になるものと思われる。

こうした点をふまえるなら、プラー・ブック漁の研究が魚と人類との関係性について把握することを出発としながら、現代タイにおける文化や社会の研究として有効な切り口を提示することができるのではないか。この点こそが本論でもっとも強調したい点である。今後、さらにプラー・ブックの民族魚類学的な調査を継続するなかから、研究のあらたな展開を模索したい。

謝 辞

今回の調査を実施するにあたり、タイ国プーミポン国王陛下、シリキット王妃陛下、ワチラロンコーン皇太子殿下、シリントーン王女殿下ならびにチュラーポーン王女殿下より格別のご配慮を賜った。ここに衷心より厚く御礼を申し上げます。

スウィット農業・協同組合省大臣には、本調査をおこなう機会を与えていただいた。また、アナン同省副次官、カムロン知事（チェンラーイ県）、プロートブラソップ水産局長、ブンソン郡長（チェンコーン郡）、チャムラット村長（ハートクライ村）、サネー上級淡水漁業専門官、チャランターダー水生天然資源博物館長、ウイエンチャイ郡淡水水産試験場長チャイシリ氏、プラー・ブック漁師クラブ代表ブンリエン氏、在タイ日本国大使館の恩田宗大使、吉川元偉公使ならびに館員各位を始め多くの方がたより貴重な資料提供および調査にさいしてご協力とご援助をいただいた。この場を借りて深謝したい。また、プラー・ブックの写真を提供していただいた、財団法人進化生物学研究所研究員の河本新氏に感謝の意を表したい。

なお、国立民族学博物館の石森秀三教授ならびに田村克己助教授には本論文を作成するにあたって貴重なご助言をいただいた。記して感謝したい。

終わりに、本調査の対象となったプラー・ブックたちが、末長くメーコーン河に生息し続けることを心から願うものである。

20) たとえば、北方ユーラシア世界におけるクマヤジャチ、サケ、クジラ [秋道 1994]、オセアニア世界におけるサメ [LUOMALA 1984]、香港の水上生活者における聖なる魚としてのクジラ、イルカ、カメ、エイ [ANDERSON 1969] などの例がある。

文 献

- 赤木 攻・竹内隆夫
1987 「信仰と儀礼——祖霊祭祀を中心に」北原淳編『タイ農村の構造と変動』勁草書房、pp. 109-131。
- 秋道智彌
1994 『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会。
1995a 「東南アジア・オセアニアの水産資源とエスノ・ネットワーク」秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち』日本放送出版協会、pp. 7-87。
1995b 『海洋民族学』東京大学出版会。
- AKIMICHI, T. (ed.)
1996 *Coastal Foragers in Transition*. Senri Ethnological Studies No. 42. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 秋篠宮文仁・多紀保彦
1994 「東南アジア 人と魚」『水産振興』313: 53。
- AMPHOE CHIANGKHONG
1996 Thi wa kan-amphoe Chiangkhong *Banyai sarup amphoe Chiangkhong changwat Chiangrai* (チェンラーイ県チェンコーン郡概要)。
- ANDERSON, E. N. Jr.
1969 Sacred Fish. *Man* (n.s.) 4: 443-449.
- CHEVEY, P.
1930 Sur un Nouveau Silure Géant du Bassin du Mékong, *Pangasianodon gigas* nov. g., sp. *Bulletin de la Société de Zoologique, Français* 55: 536-542.
- DAVIDSON, A.
1975 *Fish and Fish Dishes of Laos*. Vientiane: Imprimerie Nationale Vientiane.
- DUKE, A. H.
1921 Curious Fishing Ceremony on the Upper Mekong. *Journal of Natural History of the Royal Societies of Siam* 4: 197-198.
- DURAND, J.
1940 Notes sur Quelques Poisson D'Espèces Nouvelles ou Peu Connues des Eaux Douces Cambodgiennes. *Inst. Indochine Nhatrang* 36: 1-40.
- FIRTH, R.
1966 *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. New York: Norton.
- FUMIHITO, A.
1989 Morphological Comparison of the Mekong Giant Catfish, *Pangasianodon gigas*, with Other Pangasiid Species. *Japanese Journal of Ichthyology* 36(1): 113-119.
- FUMIHITO, A. and Y. TAKI
1989 Pangasiid Catfish, Potential Breeding Resources in Southeast Asia: Their Biology and Genetic Relationships. *Proceedings of the 6th International Congress of SABRAO (Society for the Advancement of Breeding Researches in Asia and Oceania)*, pp. 901-904.
- GILES, F. H.
1935 An Account of the Ceremonies and Rites Performed When Catching the Pla Buk. *Journal of the Siam Society* 28: 91-113.
- 林 行夫
1984 「モータムと呪術的仏教——東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に」『アジア経済』25(10): 77-98。
1989 「ダルマの力と帰依者たち——東北タイにおける仏教とモータム」『国立民族学博物館研究報告』14(1): 1-116。
- KINGSHILL, K.
1976 *Ku Daeng-The Red Tomb: A Village Study in Northern Thailand*. Bangkok:

Suriyaban Publishers.

LUOMALA, K.

- 1984 Sharks and Shark Fishing in the Culture of Gilbert Island, Micronesia. In B. Gunda (ed.), *The Fishing Culture of the World 2*: 1203-1250, Budapest: Akadémiai Kiadó.

MEENAKARN, W.

- 1984 Taxonomically and Behavioral Difference of Pla Buk, *Pangasianodon gigas* Chevey and Pla Swai, *Pangasius sutchi* Fowler Fingerling. *National Inland Fisheries Institute, Thailand, Technical Paper 41*.

MEKAN, W.

- 1988 Suksa Kau-pliang plaeng laksaua bang prakan khong *Pla Buk* (プラー・ブックの成長にともなう形態的变化についての研究). *Warasan Kaupramong 41*(1): 33-40.

NISHIMURA, A.

- 1984 Fishing in Indonesia from the Marine Ethnological Viewpoint with Respect to Wallace's Line. In B. Gunda (ed.), *The Fishing Culture of the World 2*: 677-703, Budapest: Akadémiai Kiadó.

PAVIE, A.

- 1904 Mission Pavie Indo-Chine 1879-1895: Etudes Diverses, III. *Recherches sur l'Histoire Naturelle de L'Indochine Orientale 3, Poisson*, Paris.

POOKASWAN, T.

- 1969 *Pangasianodon gigas* Chevey. Bangkok: Inland Fisheries Division, Department of Fisheries, Thailand.
1983 Pla-Buk Chiangkhong (チェンコーンのプラー・ブック). *Warasan Kanpramong 36*(4): 339-345.

RATCHABANDITTAYASATHAN

- 1979 *Saranukrom Thai* (タイ百科事典) lem 16. Ratchabandittayasathan, Krungthep.

RATCHASENA, P.

- 1948 Ruang pla-buk lae prapheni kan-chap pla chanit ni (プラー・ブックとその捕獲慣習). *Warasan Sinlapakon 2*(1): 70-83.

ROBERTS, T. R. and C. VIDTHAYANON

- 1991 Systematic Revision of the Asian Catfish Family Pangasiidae, with Biological Observations and Description of Three New Species. *Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia 143*: 97-144.

SERÈNE de R.

- 1945 Pratiques et Coutumes de Pêche des Laotiens. *Indochine 233*: 263-270.
1959 *Fishing and the Ang Festivities: In Kingdom of Laos*. Special Issue of France-Asie.

SMITH, H. M.

- 1945 *The Fresh-Water Fishes of Siam, or Thailand*. Smithsonian Institution National Museum Bulletin 188, Washington: Government Printing Office.

莊司和子

- 1996 『ソムタムの歌』筑摩書房。

高井康弘

- 1991 「北タイの守護霊観念と農民家族——ピー・プーヤー儀礼の事例研究」『アジア研究』37(2): 33-69。

多紀保彦

- 1979 『未知の国 未知の魚——淡水魚のルーツを求めて』マリン企画。

TAMBIAH, S. J.

- 1970 *Buddhism and the Spirit Cults in North-East Thailand*. Cambridge: Cambridge University Press.

田辺繁治

- 1986 「スピリットの交易」『月刊みんぱく』10(11): 15-17。
1993 「供犠と仏教的言説——北タイのプーセ・ヤーセ精霊祭祀」田辺繁治編著『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学出版会, pp. 35-70。

通産省公報編集部

- 1995 「特集号 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（通称：ワシントン条約）に係る輸出入手続等について」『通産省公報』通産省，pp. 13-115。
- VIDTHAYANON, C.
1993 *Taxonomic Revision of the Catfish Family Pangasiidae*. Doctorate Dissertation Submitted to Tokyo University of Fisheries.
- WELCOMME, R. L.
1985 *River Fisheries*. FAO Fisheries Technical Paper 262, Rome: Food and Agriculture Organization.
- WETCHAGARUN, K.
1980 Integrated Agriculture-Aquaculture Farming Studies in Thailand with a Case Study on Chicken-Fish Farming. In R. S. V. Pullin and Z. H. Shehadeh (eds.), *Integrated Agriculture-Aquaculture Farming Systems*, Manila: International Center for Living Aquatic Resources Management, pp. 243-249.
- WFT (WILDLIFE FUND THAILAND)
1995 *Mekong Giant Catfish: The World's Largest Scaleless Freshwater Fish in Nearing Extinction and Preliminary Recommendations Regarding Conservation of the Mekong Giant Catfish*. Bangkok: Research and Wildlife Fund Thailand under the Royal Patronage of H.M. the Queen.

[資料] プラー・ブック漁師クラブ会則

チエンラーイ県チエンコーン郡ウイエン町第7村（ハートクライ村）

第1章 クラブおよび場所について

第1項 会の名前を「ハートクライ村プラー・ブック漁師クラブ」とする。

第2項 クラブの所在地は、在任中の当該クラブ代表の住所とする。

第2章 目的について

第1項 クラブ事業に要する費用を会員が獲得するのを支援するため。

第2項 ハートクライ村漁民の副業における秩序維持のため。

第3項 チエンコーン郡の観光の支援および奨励のため。

第4項 グループの相互理解および団結のため。

第3章 会員について 会員にはつぎの2種類をおく。

第1項 正会員 ハートクライ村のプラー・ブック捕獲船の舟主および舟乗りに限る。

第2項 準会員 従前から漁業活動に協同参加したことがある近隣村のプラー・ブック捕獲船の舟主で、クラブに対して善意を有し、委員会が承認した者に限る。

第4章 会員の行動規範について 会員はクラブの一部であり、つぎの通り行動しなければならない。

第1項 出漁は自らが抽選した順番によらなければならない。いかなる場合であれ、先回り追い越しは絶対に禁止する。また、その順番に登録した舟で出漁しなければならない。

第2項 プラー・ブックを捕獲すると、クラブまたはクラブと契約した者にのみ販売しなければならない。価格については、会議で合意したものを基準とする。これは、魚の価格を安定維持させ下落させないためである。この場合、魚の所有者はクラブに対するいかなる手数料も一切支払う必要はない。

第3項 会員は観光振興のために皆が協力してプラー・ブック漁のデモンストレーション事業をおこなわねばならない。また、今後の事業支援育成資金とするため、交代制で観覧料を徴収しクラブに入れる。

第4項 会員は、同じ土地のものであれ、ラオス国のものであれ、相互に衝突する条件または問題を避ける努力をおこない、もっぱら無難性を追求しなければならない。これは、われわれ自身および友好国の協力関係のためである。

第5章 会員資格の離脱について

第1項 漁業を止めることを志願した場合。

第2項 クラブ会則を守らない場合で、クラブ運営委員会が過半数で会員資格の剝奪を決議した場合。

第6章 運営委員について 委員にはつぎの2種類がある。

第1項 職務上の委員 村長（ブーヤイバーン）

第2項 運営委員 会員選出による委員9名（クラブ代表1名、書記1名、会計1名、広報1名、委員5名）。

第3項 委員任期は1期2年とする。ただし、会員が適切と認める場合は、再任を妨

げない。

第7章 福利厚生および支出について

- 第1項 会員は、当該年においてクラブが適切と合意した方法により、クラブの中央基金のための資金集めに協力しなければならない。
- 第2項 会員が事故に遭い、漁具に損害がおよび、クラブに援助を要請するにふさわしい場合、クラブ代表に通告する。通告を受けた代表は運営委員会を開催する。援助決定基準は運営委員会における多数決とする。

仏歴2533(西暦1990)年4月8日施行

(署名) プンリエン・チナラート

チェンコーン郡ブラー・ブック漁師クラブ代表